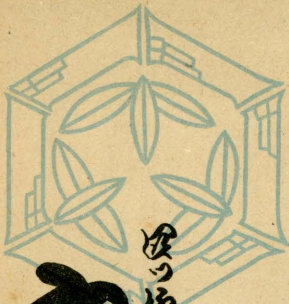


母の

人形操縮稿



母の操

交楽齋



場り語の夫太津本竹下紋

谷鱈

好
宗

乍憚口上

櫻咲く春爛漫の好季節と相成申候處市中皆々様には愈々御健勝に遊ばされ大慶至極に奉存上候然る處當座に於ては銃後日本の皆々様へ最もよき御慰安を贈上度兼々計劃致し候通り此度四月興行に於ては人形淨瑠璃古典の至寶狂言を數々選擇上演いたすを始めとして新曲の景事をも加えて折からの百花と競ひて尤も花やかに妍やかなる舞臺をしつらへ御機嫌に供ふる事と相成申候次第殊には一座連中には各々の配役を十二分に活かさんものと種々苦心研究を重ねてお目見得仕り日頃の御愛顧に酬ふべく努力仕り候間此儀よしなにお酌み取り下され何卒いつくにも倍して御眞眞御引立を賜り度御願奉申上候

昭和十五年四月一日

四ツ橋 文樂座 敬白

昭和十五年四月一日初日

初日午後二時開幕
毎日午後三時開幕

・御觀覽料・

- 一等席 御一名 金三圓三十錢
(二階座席三十錢上り)
- 二等席 御一名 金一圓三十錢
- 三等席 御一名 金六 十 錢
(各等大場特別)

一等御座席(一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南[㊦]四七壹番番
專用電話 南[㊦]三〇三二番
一般御用 南[㊦]三七八八番
の電話

お草履の準備は御座ありますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますから御便利で御座ります。



妹背山婦女庭訓

井戸替の段

杉酒屋の段

道

行

戀

小

田

卷

漁師

七

上使

姫

の

金殿の段切

竹本源太夫
野澤吉彌

竹本相生太夫
豊澤新左衛門

豊竹駒太夫
豊竹和泉太夫

豊竹呂太夫
竹本の太夫

豊竹松島太夫
豊竹英太夫

鶴澤清二郎
鶴澤叶太郎

鶴澤八造
鶴澤清若

鶴澤勝友
鶴澤網延

野澤吉藏
豊澤廣彌

豊澤富太夫
鶴澤寛若

竹本鍛太夫
鶴澤寛治郎

竹本大隅太夫
豊澤廣助

竹本南部太夫
鶴澤重造

竹本伊達太夫
鶴澤友衛門

豊竹古靱太夫
鶴澤清六

四日月の形浄瑠璃

夫太・三味線・形一人座總演出

四月初一日

初日 午後二時開幕
毎日 午後三時開幕

おつま 八郎兵衛 櫻鐺 恨 絞 鞘

鰻

谷

の段切

中

竹本鍛太夫
竹本寛治郎
竹本大隅太夫
豊澤廣助
竹津次郎
鶴澤友次郎

新曲連獅子

雄獅子
雌獅子
竹本文字太夫
竹本和泉太夫
竹本源太夫
竹本常子太夫
竹本土佐太夫

鶴澤友衛門
鶴澤友造
鶴澤友造
鶴澤友造
鶴澤友造
鶴澤友造
鶴澤友造

お染新装歌祭文

野

崎

村

の段

竹本相生太夫
竹本南部太夫
竹本伊達太夫
竹本播路太夫
豊津伊勢太夫
竹本津磨太夫
竹本隅若太夫
豊澤仙平



鰻七上使の段

お求橋 三輪女姫

道行戀の小田巻

杉娘烏帽子折三求太婆
橋下子太

杉酒屋の段

丁稚子太
烏帽子折三求太婆
家左衛門
土主茂兵衛
野田兵衛
五平衛

井戸替の段

杉酒屋の段
吉田政光之助
吉田文政之助
吉田兵五郎
吉田玉藏
吉田武藏
吉田利三郎

官實ハ金輪五郎
漁師ハ金輪五郎
宮實ハ金輪五郎
荒卷彌藤次

官求橋 女女姫
大桐吉之助

官實ハ金輪五郎
豆腐のお三輪
漁師ハ金輪五郎
女女姫

銀香具屋のおお兵衛
娘房のおお兵衛
母おお兵衛
女おお兵衛
八兵衛

子獅子
子獅子
子獅子
子獅子

親下娘
丁稚女
油屋頭
船頭

四ツ橋畔

文樂座

電話南四七壹番

申告の金も進

んで政府に賣りませう



銀行信託に
お取次ぎ致し
ます

國民精神總動員

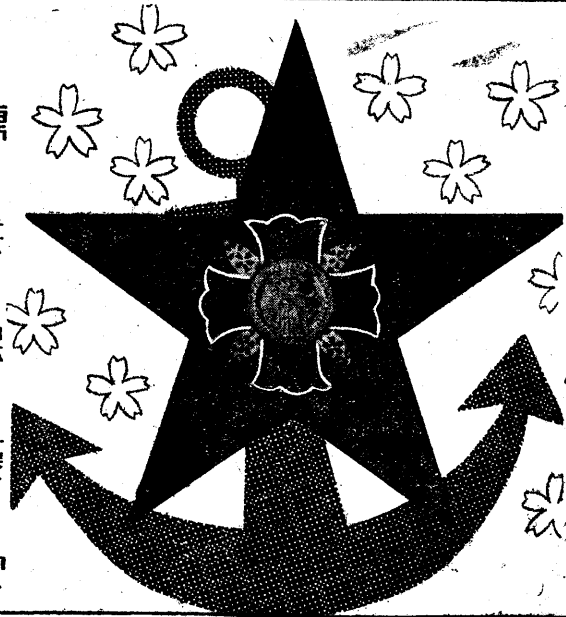


盡忠報國

舉國一致

堅忍持久

國を護つた傷兵護れ



傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

四月の 人形 浄瑠璃

四月一日初日 (初日午後二時開演
毎日午後三時開演)

妹脊山 婦女庭訓

井戸替の段
杉酒屋の段
道行戀の小田巻
漁師鱈七上使の段
姫辰りの段
金殿の段

三時〇分より
六時四十分まで

(幕間五分)

おつま 櫻鋸恨 鮫鞘

八郎兵衛 鱈谷の段

六時五十五分より
八時十五分まで

(幕間十五分)

新曲連 獅子

八時廿五分より
八時五十五分まで

(幕間十分)

久松 新版歌祭文

野崎村の段

九時五分より
十時〇分まで

(打出し)

太夫・三味線

人形一座總出演



竹まき
巻



妹脊山婦女庭訓 いもせやまをんなていじゆん

井戸替の段

竹本源太夫
野澤吉彌

人形

杉酒屋 婆 吉田小兵吉
丁稚子 太郎 桐竹紋司
烏帽子折 求女 桐竹政龜
家主 茂次兵衛 吉田玉藏
土佐衛門 吉田兵次
野平 吉田文二郎
五州兵衛 吉田利男
藤六 吉田多三郎

井戸替の段
杉酒屋の段
道行戀の小田巻
漁師鱧七上使の段
姫戻りの段
金殿の段

古く幸若舞曲の「大職冠」を承
け、操淨瑠璃に藤原鎌足と蘇我入鹿
大臣のことを仕組んだものに正徳
元年（二三七一）竹本座上演の近
松門左衛門作「大職冠」、寛保三年
（二四〇三）四月、竹本座上演の
竹田出雲作「入鹿大臣皇都諍」
があり、これに暗示を受けて作られ
たのが、この「妹脊山婦女庭訓」全
五段で、作者は近松半二、松田ばく
榮善平、近松東南に後見として三好

松洛が名を列ね、明和八年（二四三
一）正月、竹本座に上演された。結
構は雄大、趣向は奇妙、正に王朝物
の代表作で、大和方面に古來有名な
説話傳説を活用し、巧妙複雑な技巧
の極致を見せてゐる。全五段の中、
殊に三段目切山の段が舞臺技巧を弄
して名高いが、この度は珍らしくも
第四段目（入鹿退治の段は除く）を
通して上場致します。その筋は藤原
鎌足の子淡海が姿を奪して烏帽子折
求女となつて入鹿を滅さんとし、獵
師芝六、漁師鱧七の働きと、入鹿の
妹橘姫、杉酒屋の娘お三輪の犠牲に
よつて目的を達すといふ運び。求女
の風雅な姿に戀焦れて、入鹿の妹橘
姫は執心である。杉酒屋の娘お三輪
も求女を淡海としらず戀慕ひ、求女
もにくからず思つてゐる。しかし求
女は入鹿の持つ寶劍を奪取らんが爲

めに橘姫の裾へ緒環の糸をつけるが

お三輪はまた思ふ男の求女に緒環の糸をつけて互に心ときめかした戀の緒環をたぐりたぐつて、三笠山入鹿の金殿へと後をつけて行く、入鹿大臣の金殿では多くの官女近侍を集めて酒宴を催してゐる。ところへ漁師の鱧七が鎌足の使となつて尋ねて行き、その不敵の態度に驚かせ、官女の色仕掛けの毒酒にも乗らず槍襖もびくともしぬ豪膽さに入鹿を弱らせ人質結構と思ふ所存のあつて奥殿へ引かれて行く。求女のあとを追ふて来たお三輪は金殿のあたりへ辿りつき豆腐の御用から今宵こゝの大臣のお姫さまと尋ねてゐるいゝ男の婚禮があると思はされ、氣も心も宙に御殿へたづねて入る、お三輪の目なれぬ風情に多くの官女達は面白がり、驚つてやれど、婚禮の場所へつれて

行てやるからと、馬土唄や竹に雀の唄を唄はせたり、散々なぶつたあげ

く皆々振りほどいて奥殿へ入る、お三輪は怒の眼色するどく求女への嫉妬に燃えたつ心は夜叉となつて奥殿へ突き入らふとするところへ、鱧七が現はれ呼とめられるが、きかぬお三輪は遂に鱧七の刃にかゝつて斬られる、鱧七の金輪五郎は身の素性を言ひ聞かせ入鹿を殺さうと忍び入つたが、折角笛は手に入ながら濺ぐ生血がないため困てゐた處、お前に逢つてこれで本望が遂げられる、それもお前の思ふ戀男求女の實は鎌足公の長子淡海様のためになる事だと聞かされ、かゝる高貴のお方と假にも契つた身の幸せを思つて死んで行く、鱧七はお三輪の生血を笛に濺いで何なく入鹿を笛の音に寝むらせ機を狙つて打亡すといふ豪壯の裡に熱涙溢

るゝ筋立てであります。

(床本) 井戸替の段

引いたり、引いたり、ワツト、文月七日例年の、水を新井に繰返す釣瓶の綱も、フシ三輪の里、地酒商賣の世杉屋が身過ぎの水の内井戸をわけて祝ひの賑はしき、サア、濟んだと取りく、御酒洗米供物、フシ皆々汗を入れにける、地主の母は納戸より運ぶ用意の酒肴、いつにないほや、機嫌、近所の衆どなたも大儀でござんした、嘉例の通り酒盛して、暮れるまでゆつくりと遊んでいんで下さんせ、コレ土左衛門さん、年かきにお前から酒始めて下さんせ、ア、又雑作な止しにさんせいで、おいらが相借屋で手傳ふのも、年中爰の井戸の水を使ふ恩返し、氣をはつて貰うて衛ない、したが折角のお振

舞ぢや、皆馳走になりまししょうかい
 サア、是からはいつもの通り賑
 かに遊びましよ、ホンニそれは左様
 と、コレ内儀さん、みれば爰にも寺
 屋の様に、七夕様が祭つてあるな、
 サイノ、マア見て下さんせ、愛たて
 ないと思はんしよが、こちらの娘の
 アノお三輪、何やら星様に願がある
 とて、あの様に内で祭も色々の供へ
 物、ホ、そりやマア奇特なこつちや
 そして此お娘は留守かえ、アイ小さ
 い時行た寺小屋へ、七夕に呼ばれま
 した、サア、一つ飲んで下さんせ
 ヤイ子太郎、酌をしをらぬか、ど
 りや吸物に豆腐でも、地たいて來ま
 しよと母親は、フシ納戸に入れば打
 ちくつろぎ、廻る盃底なしども、引
 受け、いつき飲み、肴の鉢を、
 引寄せて箸放さずの、フシカ、滅多
 喰ひ、丁稚の子太郎、フシ呆れ顔、

ア、扱々、氣味のよいとは挨拶ぢや
 よつ程下作な呑み様ぢや、井戸の鮎
 が水呑む様に口明いてがつぶ、
 エ、夫では味が知れ難かる、コレ此
 酒は内儀様が張り込んで、こちの銘
 酒の第一番、男山といふ酒ぢやが、
 こなた様達は眞の無茶飲、此銚子の
 代りめから、もう鬼殺ししてくれ
 う、そしてまあよい加減に酒飲まん
 したら、例の通り騒ごかい、おつと
 合點と口利の土左衛門が眉に皺、そ
 れはさうぢやが、北隣へ近頃來た相
 借屋の烏帽子折、此井戸がへにも立
 合はず、餘りなめた奴ぢやないか、
 野平なんと思やるぞ、ソレ、なま
 じらけた顔付で、馬鹿慇懃な生れ付
 き、平生ぬかす挨拶も仔細らしい切
 口上、此井戸がへに出合ぬからは、
 急度物いひ付けてやると、借屋の内
 の神様達御託宜もとりに、それ

とも知らずのつし、歸る隣の烏
 帽子折、辛き世渡り甘口に羊羹色の
 辛小袖、一腰指したとりなしに、浪
 人とこそ知られける、門口より腰か
 いめ、隣家にをります其原求馬でご
 ざります、お屋敷方の用事に付き、
 未明より罷出で只今歸宿仕る、後室
 様にはいよ、御機嫌うるはしうご
 ざりませう、後刻緩りと御意得ませ
 うと、我が家へ入るを惣々が、マア
 待たんせ、けふはコレ爰の井戸がへ
 相借屋が寄つて居るのに、こな様ば
 かり來ずに居て、交際が濟むのかい
 但しおいらを潰すのかと、ねだり臺
 詞に烏帽子は胸り上り口に兩手をつ
 き、是は、お顔を見れば、皆合璧
 のお方々、この井戸がへのお手傳ひ
 會以て私にせず、是と申すも不案内
 から先格の作法を存せず、段々の失
 禮眞平御赦免下されと、疊に額すり

付ける、ア、これ、又仔細らし

ルデト。

一人、振り残されてグニヤとなり、

いいはんすかいの、ハ、勝手を知らにやしよ事がない、了簡せいなら、

ヤア千代の始めの一踊、先づは松坂こえたえ、踊はありや、ハツ、ハ

ア、ヤレ、とうと俺までやくたいにしをつた、ヤイ子太郎、心持はど

夫で濟む、此方も一番いうた跡は、モウいざこざはないわいの、此土左衛門が吞込んだ、然らば貴方様

ヨイヤサ、烏帽子屋殿はもぢと手持不沙汰に揉烏帽子、ヤツトサ、ヨイ、愛の娘の柳さび引き立烏帽子見すまして帆懸烏帽子と歸らる

ちぢや、エ、何云ふぞい、イヤ、時にコリヤ、子太郎、俺は貴様に内々で頼まなやならぬ事がある、マア

は、其いざこざとやら申す御遺恨はござりませぬか、サアもうよい、言はんすな、扱おいらは餘程酔うて居る

ム、ヤツトサ、ナホム地家主茂次兵衛フシいつきせき、コリヤ、いかに嘉例の祝でも、あんまり騒ぎが

る、さてまあ方々で噂をきけば、この娘は縹緞は好し、まだまあ男の

是からは嘉例の騒ぎや、調子が合はないで面白ない、此石できゆつとやらんせ、ハ、忝うござりますが、

かき高など、コレヤヤイ、茂次兵衛、叶はずとも、に阿る詞も拍子づき、ヤツトサ、ヒヤウシ此家主をそでにして、酒を飲めとも言は

る、とガタ、朋ぶるひ、魂抜けて中、

私、一滴もたべませぬ、ヤツト、そしたら勝手次第、サア是から騒ぎの趣向、此土左衛門に烏帽子屋殿五

喰ひ、近所を構はぬ大騒ぎ、ヤツトサ、是程いうても聞入れにや、家明

身は家主の阿呆ぞや、月夜も闇も無茶苦茶の色を、しようとお姿を見

洲兵衛に野平藤六めて五人の大踊り大鼓の役は、丁稚の子太郎エ、カ

サ、是程いうても聞入れにや、家明お家主渡したと踊る拍子の酔機嫌、

とこ買ふて来ておくれと子太郎側へ引き寄せて、くどく心ぞ、すからし

が二役ぢや、サア、エ、ヤ、ヤ

無中になつて立歸る、後に家主たど

き、ハハン、ちのお三輪さんに御

が二役ぢや、サア、エ、ヤ、ヤ

無中になつて立歸る、後に家主たど

き、ハハン、ちのお三輪さんに御

が二役ぢや、サア、エ、ヤ、ヤ

無中になつて立歸る、後に家主たど

き、ハハン、ちのお三輪さんに御



杉酒屋の段

竹本相生太夫
豊竹呂太夫
豊澤新左衛門

人形

丁稚	子太郎	桐竹紋司
橋	姫	吉田光之助
烏帽子折	求女	桐竹政龜
娘	お三輪	吉田文五郎
杉酒屋	屋婆	吉田小兵吉

もひげむちや顔、他所の男はいざ知らず、家主のあられもない、お三輪にほれたと云ふ事が、嘘偽りに言はれようか、つい、そのお言葉に違ひなくば、何ぞ確な頼みの印、それ見ただ上で、これまあ、おとりもち、ヤイ、子太郎、出放題に何吐かすと、もう俺を夢中にしをつたわい、ホンニ肝心の用を忘れた、オイ、婆さん家にか、會ひ度いと、フシいふ聲聞いて納戸より、ヲ、是はママお家主様か、ヤイ子太郎め、あなたがお出なされたら、何故おれに知らせをらぬ、ナアニ言はんすやら、お家主様も、いんま迄同じ様に踊つてであつた物、又つけ、と何いひをる、ヤイ申し、なんぞ御用でござりまするか、ヲ、用とも、大事の用、さるお侍から頼まれたが、入鹿様の言付で、ソレ鎌足といふ和郎の子息

の淡海、方々流浪して居るげな、それを見付け出したら大金、何でもマア此方へござれ、とつくりと言うて聞かそ、サアちやつと、ハ、そしたらお前へ参りませよ、ヤイ、子太郎よ、サア忙がしうなつて来た、もう日が暮れたさうな、火も消して、見世明け、用心に氣を付けい、又此娘は寺屋から戻りが遅い、ソレ酒買が来たら擲出せ、盗人が来たら酒はかつてやりをれと、氣の急ぐ儘に間違ひだらけ打連れ。

(床本) 杉酒屋の段

てこそ出でて行く日と共に營む様も入相の、マシ四方の市庫戸鎖し時、子太郎跡を打見やり、灯を上げ表の戸夜の構へのそこ、フシなたの道より歩みよる振の袖の香やご

となき面を隠す衣被き、フシ誰白絹の優姿、窺ふ内に隣の軒、知らせのしはぶき主の求女、今宵はどうして早かりし、サア〜此方へと其跡は言はず語らず手を取つて、フシ戸口立寄せ入る跡に、子太郎は不審顔、隣の門口耳をあて、聞き濟して立戻り、なんでも隣の烏帽子奴は、おれと違うてよつ程豪い、色事師ぢやわい、こちらのお娘に聞せたら大抵のことぢやあるまい、エ、はし早い奴ではあると、フシ眩く所へ、娘のお三輪、寺子屋戻り、早足に門口這入れば、やお三輪さん戻らんしたか、サア〜、事ぢや〜、大事ぢや〜、ヲ、あの人わいの、何ぢやいの、私ぢやいの私に憐りさしやつたわいの、さしやつたわいの所かいのコレお前に忠義をいうて聞かず、忠義とは何の事ぢやいの、エ、忠義と

は忠臣の事ぢやわいの、サ其忠臣は知つてゐるがの、夫がどうぞしたかや、サ其忠臣はの、アノ隣の烏帽子奴がな、隣の烏帽子とは、ム、求女様のことかいの、ヲ、求女々々、其求女の姿から起つた事、こちらの内儀様は家主殿へ用があつていかしやつた其跡へ、何ぢやか知らぬが眞白な絹をかつき、幽霊かと思うたら、美しい街妻が隣の門口、こと〜叩いた、そしたら求女様がつゝと出て、よう早う來たナアと、手に手取つて内へはいつた、ナントお三輪様、コリヤだまつて居られまいがな、ム、そんなら何といやる、求女様の所へ美しい女中様が見えて、其女中様を連立つてはいらしやんとしたと、言やるのか、アイそりやマア合點のいかぬ事、幸ひか〜様も留守なれば、其方往て求女様を爰へ連れて戻つてた

も、ヲツト合點呑込んだと走り出でて隣の門破れるばかりに打敲き、コレ求女様、隣の酒屋から使に來た今のが濟んだら印判持つてござんせと、フシ口から出次第、求女は憐り何やらんと、立出づれば物をもいわず、マア〜此方へと、無理やりに手を引連れて、フシ我が家の内、夫と見るより娘のお三輪、口にはねど赤らむ顔、求女様お歸りなされたか、ホ是は〜お三輪様、寺屋へお出なさつたげなと、互に味な墨付きを、子太郎がひつ取つて、サアおれが役はもう是迄。そこへ何かの立引さんせ、爰らで我ら粹を通し、夜食の扶持にありつから、兩人共後に逢はうと、納戸へ、フシ走り入りけける、跡に二人はつきほなく、おぼ子育ちの娘氣に思ひ詰めたる一筋を言はうとすれば、胸迫り今子太郎に聞

いたれば、美しい女中様が宵からは
お前へ来てちやげな、定めてそれは
隠し妻是迄お前とわたしが中逢ふ事
さへも、たま／＼に、千年も萬年も
變らぬ契りと仰しやつた、其約束は
偽りか、浮世の譯も辨へぬ、在所育
ちのわたしでも、いひかわした事忘
れはせぬ、あんまりむごいと、取付
いて、涙先立つ、フシ恨言是は思ひ
も寄らぬ疑ひ、成程女中は來て居る
が、あれはソレ春日の神子殿、其連
合の禰宣殿の烏帽子を誂へに見えた
のぢや、美女はおろか、いかな天女
か影向あつても、外へ散る心はない
和歌三神を誓にかけ、偽りは申さぬ
と、フシ時の間に合ひ落付かせばさ
すがおぼこの解けやすく、神様迄誓
言に、夫でわしも落付いた、必ず變
つて下さんすなと立上つて七夕に供
へ祭りし二つの緒環、持出でて前に

置き、わしが寺屋へ往た時に、お師
匠様に聞いた殿御の心の變らぬ様に
星様を祈るには、白い糸、赤い糸、
緒環に針を付け結び合せて祭るとや
ら、ヲヲそれが則ち願ひの糸の乞巧まじや
針、ム、お前も能う知つてちやナア
白い糸は殿御と定め、女子の方は赤
い糸、それで私も此願籠め寺屋で見
た本の中に心をかけし女の歌、ア、
何とやら、ヲ、それよ繩渡る、思ひは
ち／＼に結ばれて、幾代願ひの糸の緒
環、ホ、其男の返しには、逢見ての
後も願ひの糸筋をよそへ、亂すな君
が緒環アイ／＼さうでござんした、
何時までも變らぬるし、赤い糸をお
前に渡し、白い糸を私を持ち、契り
も長き願ひの糸、夫婦の約束星合に
鵲ならぬ、フシ緒環を手代の媒介取
りかはし肌付き合ふ、フシわりな
き縁、求女が内より以前の女歩み出

でて、こなたの門口、隣の烏帽子折
様は、こなたへ来てござるかな、許
さつしやれと内へ入る、姿に求女は
手持不沙汰、お三輪は何の氣も付か
ず、ア、彼方が今のお人かえ、ツイ
ノ、あれ／＼神子様ぢや、それで薄
衣着てござるナア申し、お前様はア
ノお連合様の烏帽子を誂にお出でな
されましたのぢやナア、左様でござ
りませうがな、サ、さうでござ
りますと紛らかす包む詞の絹を漏る
月の笑顔をびんとすね、コレ申し求
馬様、アノ女中は、お下婢か、何人
でござります、アイヤ是は此酒屋の
御娘、ム、其マア隣の娘御と、最前
から久しい間、何の用がござりまし
たと、問はれて求女は答へもなく、
うちつく素振見てお三輪、ア、申し
コレ神子様とやらいふ女中様、人を
マアお下婢かの何のと、ひつこなし



道行戀の小田卷

おみわ 豊竹駒太夫
 求女 豊竹和泉太夫
 橋姫 豊竹呂太夫

ツ 竹本さの太夫
 レ (豊竹松島太夫 豊竹英太夫)
 鶴澤清二郎
 鶴澤叶太郎
 野澤八造

たものゝ言ひ様、求女様にはアイ私
 が用がたあんとござんす、お前のお
 世話になるまいし、構うて下さんす
 な、ヲ、是ははしたない、其様に言
 はしやつても、そもじなどの用を開
 く、求女様ぢやないわいなう、サア
 お歸りと手を取れば、お三輪が隔て
 ムイエ〜〜わたしが未だ用があ
 る、往なす事はなりませぬ、イ、ヤ
 こゝには置きはせぬ、邪魔せずとそ
 こ通しやと、手を引立てゝ立出づれ
 ば、イヤ放さじと、お三輪もまたあ
 なたへ引けば、こなたへ引く譯も渚
 に戯れる雁、翅振袖ふり分け姿、フシ
 戀を争ふ其折から、いきせき戻る此
 家の母、ヤア求女殿、此方様には用
 がある、何處へも遣る事ならぬ、動
 くまいぞと身構へに、何かは知らず
 白絹の姫は外へと出行くを、とめる
 求女に又すがる、姫を押分け母親は

求女やらじと引止め繋ぐ手と手を櫛
 の、フシ風に揉まるゝ争ひに、子太
 郎立出で見廻して、これ幸ひと母親
 の帯に確り括つたる、繩先を桶の吞
 口に結付け納戸へ逃げて入る、此方
 は互に戀慕ひ姿亂るゝ姫百合の手を
 振りきれば、一時に亂れて走ると母
 親が遣らじと追へば、繋ぎ繩力む拍
 子に呑口抜け、酒は瀧津瀬洩り敗亡
 三人門へ遅れじと同じ思ひを跡や先
 道をしたうて追て行く。

(床本) 道行戀の小田卷

岩戸隠れし神様は誰と寝して常闇
 の夜毎々に通ひては、また歸るさの
 道もせきもせ、それも何故戀故に
 やつるゝ所體はづかしたと、佛隠す
 薄衣につゝめど薫り、橋姫、思はぬ
 人を思ひ詫心のたけをくどけどもつ
 れなき松の下紅葉こがれてたへんた
 まのをも殿故ならば、捨草も暫しは

人形

橋 求 お

姫 吉田光之助
女 桐竹政龜
輪 吉田文五郎
三

(鶴) 野澤清 友若
(鶴) 野澤勝 延芳
(豊) 野澤吉 彌藏
澤廣

いかふ芝村の賤の男が置手拭で、忍び忍びの出あいづま晩にござらばナコレのんやほんにさ春月の柿の木の枝こへて、連理を契る言の葉は、それも戀中、爰はまた箸中村よ一もりの長者が後と名にひやく、釜が口をも開放れて、あゆむにくらきくれ竹のしげれる中を、分行ば葉毎の露がほろ／＼とほろ／＼打なる雉子の聲思ひくらべていとゞ猶心細野に立ちつくすにくやかやしにおどさるゝわれが姿に又おぢて、はつと立行羽風につれて、ちり／＼ちるや柳本流るゝ水に裾ぬれて物思へとや帯とけの里羨し、自はついに一度の情さへないて身をしる涙雨ふるの社の御燈の影か松の木の間にち／＼ちちと見へつ隠れつ歸るさの後を求女がしたひ來て互にはたと行合の星の光りに顔と顔ヤア戀人か何故に爰迄後を追鳥は、

もしや罽の契りをも叶へてやるとお心かと胸にはいへど詞には、面はゆぶりの袖几帳なるほどせつなる心ざし、仇に思はじ、さりながら、さほどどこがるゝ戀路にて、晝をば何とらば玉の夜斗りなる通ひ路は、いとふしんなり、名所を聞いたる上は、こなたより二世のかためは願ふ事明させ賜へとひたすらに問はれて實にも恥かしの、もつて餘れる憂身の上語るにつらき葛城の嶺の白雲有ぞともさだかならざる賤の女と思ふて深い疑ひの雲を晴して自が思ひも晴らして賜はらば、どんな仰も背くまいたとへ草葉の露霜と消ても何のいとかやせぬ、これ程思ふに膈慾なとけぬお前のお心は餘りむすぶの神様を祈り過したとがめかやつれなの君やと恨詫思ひ亂るゝ薄かけそれとお三輪は走り寄り、中を隔てゝ立柳立退く



漁師鱧七上使の段

口 豊竹富太若

奥 竹本綴太夫
鶴澤寛治郎
豊澤大隅太助

人形

荒卷彌藤次 吉田玉市
宮越玄蕃 吉田玉徳
入鹿大臣 吉田玉幸
漁師鱧七 吉田榮三
官賞八金輪五郎 大せい

袂引とどめ、エ、開へませぬ、求女様、ソリヤ氣の多い悪性な、そもや二人が馴れ初めは、始めて三輪の過し夜に、葉ごしの月の儂はお公家様やら侍様やらしれぬ形ふり、すつきりと水際の立よい男、外の女は禁制としましてかためし肌と肌、主ある人をば大膽な、断りなしに惚るとはどんな本にもありやせまい、女庭訓練方、よふ見やしやんせ、主嗜なされ女中様、イヤそもじ逆たらちねの、ゆるせし中でもないからは、戀は仕がちよ我殿様、イ、ヤわたしが、イヤわしがと共に縄りつ、手を取て園に色よく咲草時は、男女になぞらへ、いはゞ言はれふ物か、夕顔の梅はものゝふ、櫻は公家よ、山吹は傾城、杜若は女房よ、いろは似たりや葛蒲はめかけ、牡丹は奥方よ、桐は御主殿、姫百合は娘ざかりと、なで

しこの、サアなるぞへ〜、なるとならずとなら坂や此手柏の二人の女にらめばにらむ萩と萩、中にもたるゝ男へし、放ちはやらじと縄り付、こなたが引ばあなたがどめ、戀の柵、葛葛付まとはれてくる〜廻るや、三つの小車の花よりしらむ横雲のたなびき渡り、あり〜と三笠の山も程近く、鳴鐘の音におどろく姫歸る所は、いづくぞと求女が氣轉振袖の端にぬふてふ取りかはす縁のおだ巻、いとしさの餘つて三輪も悋氣の針男の裾に付る共、しらずしるしの糸筋をしたひしたふて。

(床本) 鱧七上使の段 (口)

榮ゆる花も時しあれば、末枯嵐のあるぞとは、いさ白雲の高御座、新に造る玉殿は、彼の唐國の阿房殿、爰に移して三笠山、月も入鹿が威光に

は、覆はれまらず是非なけれ、腋門の方より宮越玄蕃、荒卷彌藤次、御前よき儘高う吹く、帆かけ烏帽子も十分に、仰反り返り入來り、ホウ仕丁ども朝清めな、イヤなに玄蕃殿、此度新たに築かれた此山御殿、朝日に輝やく所は、吉野龍田の花紅葉、一度に見るとも及びますまい、ナエサ、イヤモ言語に述べがたき、御物好、瑪瑙の梁、珊瑚の柱、水晶の御簾瑠璃の障子、コレ見られよ、飛石は琥珀砂は金銀、又釣殿に登り見おるせば、春日の杉も前栽の草びら、若草山葛籠山は撒石同然、猿澤の池は、お庭の井戸に見えますと話の尾に付く仕丁ども、ア、結構な御普請でございます。そうして何やらふつ、と好い匂ひが致します、ヲ、其筈、縁板檻に至る迄皆伽羅と沈、シタリ抹香や鉋屑とは違うた物

ぢやなう、又次、サイ、又お學問所は唐を寫して唐木ぢやげなの、ハアソ、其唐木とは何々ぞ、ヲ、先づ花梨、フソ、紫檀、フソ、黒檀、ホイ、鐵刀木、ホイ、うらやさん、ホイ、當卦本卦、や手の筋や、男女相性や墨色の考、コレ、失せ物、待ち人、コレ、書判の善惡、ア、コレ、ソリや山御殿ではなうて山伏ぢやぞや、サア王様も此山で寝やしやるによつて、山伏ぢや、エ、人を嘲弄するかな、イヤ長老とは坊主の事か、イヤ女子の事ぢや、ソリや女郎ぢや、イヤ如露とは花に水かける物ぢや、エ、どう言やかう言ふと、なんぼ貴様がくずな辯でもおれにや敵はぬ、ヤイふるなの辯ぢや、くずなどは魚ぢやわやい、イヤくずなぢや、ふるなぢや、くずなぢや、ヤイヤ、騒がしい、ソリや

何事、清め仕舞はば早く下れ、皆行け、と、追てやり、アレお聞きあれ彌藤次殿、我が君此殿へ御移り見え、物の音近く聞え申す、いかさま左様と威儀つくるひ殿重。
 (床本) 縫七上使の段 (奥)
 にこそ控へ居る、花にくらし月にあかし、酒池の遊びに酔つかれ、御殿御殿の通ひ路も數多の官女が道樂に君の機嫌を鳥甲調ぶる笛や箏ひちりき太鼓の音も鶉徳に己が不徳を押昇る雲間の深縁蜀錦の梅の上、むんづと座せし有様は、實に類なき榮花の殿、玄蕃彌藤次頭を下、先達て吟上雲客達より君の壽を祝し申されし、數の嶋臺、ソレ女中方觀覽に備へられよ、アツト、こたへて持出る思ひの飾り物、何がな君が壽を祝ふ鶴龜、松竹の影は千尋の深縁松と鶴

龜合せて見れば、一萬二千の齡を君に譲り壽く蓬萊山、扱また次の嶋臺は周の帝の妾、假の情の弟草げに寵愛の色菊や葉毎を染し其筆の命、毛長き八百歳老せぬや、薬の名をも菊の酒くめ共、盡ぬ泉の壺天上人の方々より、御祝儀なりと相述る一入興に入鹿が悦び、ヲ、百司百官より萬民に至るまで我在位長かれと願ふこと、めいゝが身の冥加なれば猶萬歳を唱よと高慢我慢の詔り、はつと兩人階下にひれふし、我々は申すに及ばず、民百姓も野に手を打て舞樂しむ誠に戸ざさぬ御代と申すは今此時に候と、めつたに追従狸々の人形に見とれ官女達、コレ、此狸々が手にもつた酌盃もとりはづし、壺には誠の造酒をたゝへた、これで御酒宴始めふか、いかさまそれはよいおなぐさみ、サア、早ふと取々

に手まづさへぎる盃の、廻れや、萬代も盡し盡せぬ歡樂の興をもよほす其所へ、物もふ頼みませうと、どつてう聲、撥餐天窓の大男、御殿間近くぼつか、着たる木綿の長上下、糊しやきばつて、立はたかり、エ、入鹿殿は爰じやな、内にならあはして下んせと木で鼻こくるむくつけ詞、宮越、荒卷目に角立ヤア何奴なれば、君の御前共はどやらぬ馬鹿者め、すきりおらふときめ付る、イヤおりや、難波の浦の籤七と言ふ綱引でござんすが、いつぞやからこちの方へ宿がへしてごんしたお公家殿、鎌きりの大身から雇はれて來たつかいでごんすと、いふて遙に見おるす入鹿、ハテ心得ぬ其鎌足め、首陽山の昔を學び、後を隠せしと聞しに、扱は難波の浦に有けるよな、普天の下、卒士の濱王地にあら

ざる處なれば今日まで飢にも臨まざ堅固におりしは我恵ならずや、それを思はどとくにまゐり恩を謝すべきのところ、使を立しは緩怠なり、エ、それおれが知つた事かいの、かふ見た所がよつぽど短氣者じやはいの、しかし喧嘩はこなんのやうに、こつきで行のがマア徳じや、鎌殿も一旦は言がよりで、てつばつて見よふと思はれた、そふなが叶はぬやらどふぞおれに挨拶してくれて、それは、きついよりはりの、たいがいの事ならもふ了簡してやらんせ、ねんごるな中は得て心安立て間違が有物じやてのふ、コレ仲直りの印じやて、まず一升おこされた、と刀の提緒にぶらんと結びし徳利にきつと目を付け、まだ日本一渡らぬ兵器唐土に有と聞く飛道具の類ひ成か何にもせよ、怪しき物を所持せしぞ

よ、方々油斷致すなと眉をひそめて
 身構へたり、エ、とつけもない、徳
 利と見やんせ、酒じや、コレそ
 こなお手代衆、早ふコレそれ、しん
 せさんせ、イ、ヤ善悪しれざる鎌足
 よりさし上し酒ならば、毒薬仕込あ
 らんもしれず、奉る事罷ならぬ、エ
 、まはすは、コレおれが毒味し
 てやる、茶碗はないかへ、そんなら
 赦さんせ、直やりじやと言つ、徳
 利の口から口、ヲ、よい酒じやにな
 是を呑ぬといふ事が有か知ぬと、ふ
 つて見やヤア、南無三、皆呑でし
 もた、エ、ひよんな事して退た、ヤ
 コレひよつと鎌殿にあはんしよと、
 まよおれが呑だといはずに、よふ
 届たと禮いふて下さんせやと、我武
 者の毒瀆、エ、まだ何やら言傳つて來
 たが、落しはせぬかと懐さがし、ヲ

ツト有は、サア是見やんせと一通を
 渡せば彌藤次押開き、ナニ、我不
 肖たるによつて、暫し心を惑はすと
 言ども、令一天四海御手の内に落入
 事正しく天の譲り賜ふ萬乗の御位、
 入鹿公に背くは天に背くに同じこと
 先非を悔て爰に降參を乞者なり、今
 より臣下に屬するの印、君の齡を東
 方朔に譬へ、此桃花酒を以て御壽を
 祝し奉る、内大臣藤原の鎌足謹で申
 すと讀上る、ハ、なまくら者の鎌足
 の臣下とならん、なんどはイヤし
 ら、しき偽りやつ、何じや、鎌殿
 をうそつきとはなんぞ慥な證據がご
 んすか、ヤアわざかしき證據呼はり
 彼が心腹いふて聞そふ、ドレ聞ませ
 うか、先此入鹿を東方朔に譬たるが
 野心の證據、そりや又なじよに、ヲ
 昔、漢の武帝が代に東方朔といへ
 るやつ、三千年に一度賞の作る桃を

三度盗でくらひし故、九千年の齡を
 たもつ、桃に百の縁をかたどり、百
 しき百官を手に入し、此入鹿を盗人
 なりと言ぬばかりの底巧み憎いやつ
 と居丈高、ア、イヤ、そりや無
 理じや、ヤアうぢ虫め、何を知
 てこしやくやつ、イヤ何にもしらん
 けど、かはりになつて來たおれじや
 によつて、一番言のじや、ヲ、鎌足
 が、はりならば、是をまかはりに心
 見よと、傍なる嶋臺追取て眉間へは
 つしと打付る、臺はみぢんに飛ちれ
 ど、びく共動かず、ア、よいかげん
 にだ、けさしやれ、其厄拂ひの代物
 東方朔とやりに譬たといふて業わか
 すのか年にあやからんせとこそ書て
 おこさしやつたれ、盗人と書ちやな
 いぞや、それにそつちから色々の講
 釋を付て盗人せんさく知つた同士は
 すゞしいとやらで、盗人の覺が有か

して、今の投打、ア、こなんは正直な人様じやと世間の噂、見ると聞くので大きな違ひ、マアそんな盗人と鎌殿を懇にはおれがさすまいはいの仁體にも似合ぬ事さんすの、よもやそふじや有まいがの、但覺がごんすか、イヤそふかいのと文盲だらけも理屈は理屈、どふでごはるとやり込れば、邪智の入鹿もにが笑ひ、ハテ口がしこくいひまげしな、ういやつ出かした、其褒美には鎌足が實否を正すまで汝は人質、最早籠中の鳥同然、歸る事は、ならぬと思へ、ヤアく、玄蕃、彌藤次いざ萩殿にて天盃を廻らさん、來れやつと引連れて帳臺深く入にけり、ア、コレおれを質に取しやると、着物や道具と違ふて代物がめしくふぞや、併しあの業腹では大抵で喰しおるまい、ヲ、すき腹に今の酒でよつぽど酔が來たはい

ドリヤどこなと一寝入やつてこまそと伸上り、エ、腰がおもひ筈よ此大小らつしもないものさゝしておこしてあた面倒なと椽板へぐはたりと鳴は相圖かと突出す鐘は篠薄、構はずころり臂枕、不敵なりける男なり、御所より外は咲き出ぬ若きこだちが入かはり、男見にくるあいそにはお茶よお菓子よ煙草盆、銚子かはらけ持て出、コレそな人はなに御用でお召寄有しは知ねど、さぞ待久しう氣もつきやう、九献一つと指置ば體寝がへり腹遣に、ほう杖つくく、打詠め、フン貴様達は誰じや、ヲ、我々は上様の身近く召るゝ女ども、何じや短い女子じや、ドレく成程、どれも是もよふにへ込だ物じや、わいらは愛な飯焚じやな、テモ希有な前垂して居るな、エ、つがもないざればみ事、わしらをとやるそなたの

名はヲ、ふか何ふかとはハテ商賣の夜網に出りや、沖でも磯でも行あたりによ寝るゆへにふか七といふ漁師く、ヤア料紙とはなんぞ書てたもるのか、それならば必繪や歌はいやじやぞや、今難波津で持はやす歌舞伎芝居の其中でもよふ聞及んだ文七、八藏の紋ならば書てほしいと子どもなき、櫻の局指寄てそふして下くも皆、そなたの様な男かや能男もたんと有である、地下の女子は羨しい、芝居は見次第、よい男は持次第、ほんにまた此御所女には何がなる、見るもく冠装束、窮屈で急な逢瀬の其場でも衣紋の紐よ、上帯よ解かほどくか大抵では下紐までは手がとどかず、つい其内には花に風、月に村雲さわりが出來てほいない別れをするはいのといふさへ顔に紅葉の局、中將や少將あたりで戀すれば



姫 戻 り の 段

竹本南都太夫
鶴澤重達造
鶴澤伊達太夫
友衛門

人 形

橋 姫 吉田光之助
求 女 桐竹政龜
官 女 大 ぜ い

あのおいかけが邪魔に成、尻目づかひは出来ぬ、其上愜氣いさかひもこつちからは檜扇で叩けばあつちは笏で留つまばりかへつていきつたばかり、いらうても見ぬ、逆鋒の雫情も受て見ず、しんきくで、くらすより、いつその事に玉の緒も絶なば絶たがましで有、もしもやさそふ水しも有ば逝たいはいのと鑑七にひしと二人はいだき付、惻りはいもう業にやし、エ、けたいなげんさいめら、あつちへきりくうせあがれとけんほろゝに言ちらされ、さつてもすげない戀しらず、玉の盃底抜男不骨ものよと、不興してほいなく奥へ入にけり、あたり見廻し長柄の酒、庭の千草にさらくと、そゝぎかくれば忽に葉たち變じて枯しぼむ、ハ、ハ、フ、フ、最前の鐘といひ、又候や此毒酒、ハレヤレきつい用心と

猶打見やる庭先へ弓と矢つがひ、ばらくく追取かこませ、宮越玄蕃いかにしても心得ぬつら魂、尋ね問べき仔細有ば、引立こよとの論言なるぞ、早くまあれ、ヲ、呼にごんせいでも行のじや、假初にもびこくとちよつとでもさはるがいな、こし骨、踏折り、せんきの虫と生別れ、さすぞ、ヤコレ家來共さん、わり様達も其鳥おどし放すが最期とつゝかまへて骨引抜、かたはしからぬたにするぞ、やどりや、おれから先へ行やんしよと事共思はぬ大膽もの、胸の強弓矢襖を引明てこそ入にける。

(床本) 姫 戻 り の 段

されば戀する身ぞつらや、出るも入も忍ぶ草、露踏分けて、橋姫すごすご歸る對の屋の障子にばらり打磔、ソリヤ、お歸りのしらせぞと、めい

庭につどひおり、しをり開いて
入まゐらせ、おいとしやく御所
のお庭の内さへも、ついにおひろひな
されぬに、戀なればこそ徒はだし、
囃朝露でお裾も濡ん、小桂に召させ
かへんと立寄て、ヤアお振袖に付て
有る此紅の糸不審とたぐり、たぐれ
ばくるくと糸による身は、さゝが
にの雲井の庭へ引れくる主は床しの
ヤア求女様かハアはつと驚く姫より
も、騒ぎさゝめく局達、扱ても見事
引寄せた七年物の戀人様か、よふこ
そお入り遊ばした、サアくとちへ
と手を取ば、イヤ手前はつい道通り
此おだ巻を拾ひ上るやいな、めつた
に引れ参つた者、何にも存せぬお赦
しと出る向ふを立ふさぎ、エ、手の
わるいなされ様、わたしらに御遠慮
は内々のお咄しなら、どりやお次へ
と立て行く、姫はとかうの詞なく差

うつむいて、思案の求女、フン此御
所の姫とあれば、聞に及ばず、入鹿
の妹橋殿と。いはれて、はつと胸せ
まり、入鹿が妹と知り賜はば、よも
お情けはあるまい、と、隠し包みし
かいてもなふ、御存じ有しお前こそ、
藤原の淡海さまと、いふ口ちやつと
袂に覆ひ女なれど、敵方に我名を知
は一大事、不便なれど助けがたし、
成程お道理御尤、生て居る程思ひの
種、お手にかゝるがせめての本望、
かふいふ内もお姿やお顔を見れば輪
廻が残る、サアくと殺して下さんせ
と、刃を待つたる覺悟の合掌、フン心
底見へた、が誠夫婦となりたくば、
一つの功を立られよ、一つの功を立
よとはへ、入鹿が盗み取たるこそ、
三種の神器の其一つ、十握の御劍奪
ひ返して渡されなば望の通り二世の
契約、得心なければ叶はぬ縁、ハア

ぜひもなや、悪人にもせよ兄上の目
を掠むるは思しらず、とあつて、お
望叶へねば夫婦と思ふ義理立ず、恩
にも戀はかへられず、戀にも恩は捨
られぬ、二つの道にからまれし、此
身はいかなる報ひぞと、忍び歎いて
おはせしが、ヲ、そふじや、親にも
せよ、兄にもせよ、我戀人の爲とい
ひ、第一は天子の爲命にかけて、仕
おふせませふ、ヲ、出かされたり、
シテ又しらせの相圖はなんと、今宵
御遊の舞に事よせ、寶劍奪ひお渡し
申さん、笛や鼓の音をしるべ、奥の
亭までお忍び有れ、しからは我は此
所にくるゝを暫し待合さん、かなら
ず首尾よふ合點でござんす、がもし
見つけられ殺されたら、これが此世
のお顔の見納め、譬死でも夫婦じや
とおつしやつてくださりませ、ヲ、
運命咄く事あらはれ其場でむなしく



金殿の段

切 豊竹古靱太夫

鶴澤清 六

人形

娘	お三輪	吉田文五郎
豆腐の御用	桐竹紋十郎	
漁師 <small>七</small>	吉田榮三	
實ハ金輪五郎		
女	大ぜい	

なるとても、盡未來際はらぬ夫婦
エ、忝い嬉しやと、いだしめたる
鴛鴦の、つがひし詞縁の綱引き。

(床本) 金殿の段 (切)

わかれてぞ忍ばるゝ、迷ひはぐれし
片鶉草の靡くをしるべにて、いきせ
きお三輪は走り入、エ、此小田巻の
糸めが切れくさつたばつかりで、道
からとんと見失ふた、さりながら、爰
より外に家はなし、大方此内へ這入
たに違ひはない、エ、誰ぞこよかし
問たやと、見やるさきよりお婢が被
まぶかにしやな〜と豆腐箱提げ歩
み来る、申申しと呼かくれば、ヲツ
ト吞込早合點、ヲ、お清所を尋るな
ら、そこをこちらへかふ廻つて、そ
つちやの方をこちらへ取、あちらの
方をそちらへ取、右の方へ這入て左
の方を眞直に脇目もふらず、めつた

やたらにずつと行きや、ア、イエ
〜私が尋るのは其お清所とやらで
はござんせぬ、年の頃は廿三四で色
白にくつきりとしたよい男は参りま
せんだかへ、ヲ、来たげな〜、そ
れはお姫様の戀男じやげなの、三輪
の里から後追て、来た所を何がお局
達が引とらへ、有無を言せず御寢所
へ、ぐつと押込上から蒲團をかぶせ
かけ〜、ア、〜宵の中、内
證の御祝言がある筈と、くれぬ中か
ら賢いてじや、エ、けなり、こちと
まで内股太がぶき〜と卯月あたり
のはぢき豆、とうぶの御用が急ぐに
と、しやべり廻つて出て行く、サア
〜〜ひよんな事が出来て来た、
ほんに〜油断もすきもなるこつち
やない、大それた人の男を盗くさつ
て、何じやいしこらしい内祝言じや
餘りな路付様よい〜其かはり、ど

こに居よふと尋出し、求女様と手を引て、是見よがしに逝でのけるが腹いせじやと、行んとせしがイヤ〜、はしたない者じやとひよつとあいそを盡されたら、といふて此儘に見捨てこれがどふ逝れふ、エ、どふせふぞと、心も空登る階、長廊下行かふ女中が見答て、一人が留れば二人立、三人四人いつの間に友呼千鳥むら〜と爰かしこから寄たかりついで見馴れぬ女じやが、そなたはマア誰じや、何者じや、ハイ〜、イヤ私は内方のヲ、それよさつきの

お清殿とは寺友達、奉公に出られてから久しう逢ぬなつかしきちよつと見舞に寄ましたら、是はまあ〜、よふ來た、上れ茶茶吞そふしてたばこ吞、アノお上にはあためつそふな御祝言があると聞ば開程涙がこぼれて、あたお目出たい事じやげな、ほんに内方のよふなよい衆の御祝言はどの様なものじや、儂れやれ、拜んでなりと、腹いよと、うか〜爰までまゐりました。どふぞお前方のお心で其鞆様をちよつと拜まして貰ふたら忝ふござりまするといふ顔も、恨色成紫のゆかりの女と早悟、なぶつてやると目引袖引、マア〜、そ

ちは仕合な斯いふ折に参り合、お座敷拜むといふ事は女子の身では手柄物したがこちらが吞込で、お座敷へは出す物の、何ぞさゝずば成まいに何と皆様いつその事此者に酌取そでは有まいか、よかる〜、ア、申し其酌とやらはヲ、何の又、そち達が知てよい物か、今爰で教へてやる、幸ひ爰に御酒宴の銚子嶋臺、有合の鞆君様には紅葉の局、梅の局は嫁君役、残りには介添、待女郎と櫻の局が差圖して、いやがるお三輪に長柄の銚子持せ持添、マア盃は三ツ重、嫁君へ二度ついで左へ二足、コレ立のじやはいの〜、エ、何じやぞいのふ、うか〜せずとよふ覺や、三度目ついで鞆君へ、ナ、コレ酒がこぼれるはいの、不調法な、是からが亂酒調ひ物、是も嗜みなければならぬサア〜四海波など調やいの、エ、〜とはいやか、そんなら鞆様拜ます事はマアならぬ、サそれがいやなら早ふ調やとせつき立られ、是がマア何と千秋萬歳の千箱の玉の血の涙聲つまらせて、泣じやくり、ヲ、目出度衰れに出來ました、色直しにはんなりと梅が枝でも露組でも、サア〜聞たい、所望じや〜、エ、あられもない事おつしやりませ、山家育の藪鶯、ホウ法花經も片言ばかり登り下りの仇口や馬士の唄なら聞ても居よふ、もふ何事もお赦しなされ

サ早ふ其舞様を、サア舞様が見たく
 ば早ふ颯や馬士の唄なら面白からふ
 ついでに、ふりも立て仕やいやなら
 こつちもなりませぬ、サ、歸りや
 歸りやと引出され、サアくく何
 のいやと申ませふぞいの、サアそん
 なら颯や、アイくく颯ひまする
 と、泣くも涙にしぼる振袖は鞭よ
 手綱よ立上り、竹にさ雀はナア品よ
 くだまる、ナアとめてサア留らぬ
 ナ色の道かいなア、ヨエ、爰なほ
 てつ腹めがと此様に申ますると打伏
 ば、皆々一度に手を打て扱もきつい
 嗜事、よい慰で我々がほてつ腹まで
 よれました、馬士殿大儀と言捨て行
 を驚き、コレ申し私も俱にと取纏れ
 ぞ、振放されてがばとこけ、寝な
 がら裾にしがみ付、引ずられて聲を
 上げ、ノウ皆様お情とふぞ私も御一
 緒に連れてござつて下さりませ、お慈

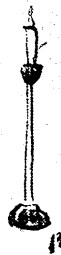
悲く手を合せ、拜み廻るを擲き
 退け、ヲ、しつこ、逆も及ばぬ戀争
 ひお姫様と張合ふとは叶はぬ事じや
 置てたも大膽女の仕付をせふと耳を
 引やら脇明より手を差入て、こそぐ
 るやらつめりつ擲いつ突倒し、サア
 く是で姫様の愜氣の名代納つた、
 いやく目出たい御祝言、三國一じ
 や、掣を取濟した、しゃんく、しゃ
 んと濟だと打笑ひ、局々へ入る後は
 前後正體泣倒れ、しばし消入居たり
 しが、エ、どふよくじやくくど
 ふよくじやはいの、男は取られ其上
 にまだ此様に恥かゝされ、何ところ
 へて居られふぞ、思へばくつれな
 い男、憎いは此家の女めに見かへら
 れたが口惜いと、袖も袂も喰裂く
 亂れ心のみだれ髪、口に喰しめ身を
 ふるはせ、エ、嫉ましや腹立や、儂
 おめく寝さそふかと、姿心もあら

くしく、かけ行向ふに以前の使者
 ヲ、そなたも邪魔仕に出たのじやな
 もふ斯なつたら誰が構はぬく、そ
 こ退やと袖すり抜てかけ入裾しつか
 と踏へ、コリヤ待て、女、イ、ヤ待
 ぬ、爰放しや放しや放しやと身をも
 がく、髻つかんで水の刃、脇腹ぐつ
 と差通せば、うんとのつげに倒れ伏
 す刀を突捨邊りを窺ひ、目を配る奥
 は豊に音楽の調子も秋の哀れなる、
 お三輪はむつくと起返り、扱は姫が
 言付じやな、エ、むごたらしい、う
 らみは、こちから有物を返つて、そ
 ちから殺さする心は鬼か蛇かいかい
 ヲ、殺さば殺せ、一念の生かはり死
 かはり付まるとて、此恨晴いで置ふ
 か、思ひ知れやと奥の方睨みつめた
 る眼尻も叫ぶ聲音もうはがれて、さ
 もいままはしき其有様、じろりと見や
 り、女悦べそれでこそ、適れ高家の

北の方命捨たる故に寄り汝が思ふ御方の手柄となり、入鹿を亡す術の一つ、ヲ、出かしたなヤ、何と賤しい此身を北の方とは、ホ、ホ、そちがかたらひ申せし方は忝なくも中臣の長男淡海公、エ、シテ又私が死るのが、いとしいお方の手柄と成て、入鹿を亡す術とはへ、ホ、ホ、ホ、其譯語らん、サよつく聞け、彼が父たる蘇我の蝦夷、齡傾く頃までも一子なきをうれへ、時の博士に占はせ白き女鹿の生血を取、母にあたへし其驗すこやかなる男子出生、鹿の生血胎に入を以て、入鹿と號く。さるに寄つて、きやつが心をとらかすには爪黒の鹿の血汐と疑着の相ある女の生血、是を混じて此笛にそゝぎかけて、調ぶる時は實に秋鹿の妻乞ふ如く、自然と鹿の性質あらはれ色音を感じて正體なし、其虚を計つて寶劍

を過なく、奪返さん鎌足公の御計略ものかげより窺ひ見るに疑着の相ある汝なれば不便ながらも手に掛しと件の笛の六穴に、たばしる血汐受けそゝぎ／＼今こそ揃ふた此幻術此笛こそは入鹿を挫ぐ火串ならん、ハア、／＼／＼有がたやと押戴き、勇み立たる其骨柄實に藤原の御内にて金輪五郎今國と鍛へに鍛へし忠臣也、ノウ冥加なや勿體なや、いかなる縁で賤の女がそふしたお方と暫しでも枕かはした身の果報、あなたのお爲になる事なら死でも嬉しい忝いといふものゝ、今一度、どふぞお顔が拜み度い、譬此世は縁薄くと未來は添て給はれと、はい廻る手におだ卷の此主様には逢れぬか、どふぞ尋て求女様もふ目が見へぬなつかしい戀し／＼と言ひ死に思ひの玉の糸切しおだ卷塚と今の世まで、なりひゞき

たる横笛堂の因縁斯と哀れ也、今國不便彌増にせめて葬り得させんと春なにお三輪が亡骸を追々馳來るあらしこ共、曲者やらぬと取巻たり、ヤアしほらしき蚊蜻蛉めら、一々勝負は面倒なり、一度にかゝれと力士立ヤアにつつき廣言打取れと前後左右に十文字、鎧先揃へて突出すを、取ては投げすへ、叩き伏せ砂石の如くほり飛され逃行やつばら餘さじと奥深くこそ。



おつまさくらつば
八郎兵衛櫻鋤 恨鮫鞘

鰻谷の段

鰻谷の段

中
竹本綴太夫
鶴澤寛治郎
竹本大隅太夫
豊澤廣助
切
竹本津太夫
鶴澤友次郎

人形

八郎兵衛 吉田榮三
女房 お妻 吉田文五郎
母 おくま 桐竹紋太郎
娘 おはん 吉田文枝
香具屋 彌兵衛 吉田玉幸
てんばの十兵衛 吉田玉市
銀 八 吉田玉藏

この淨瑠璃は安永二年(二四三三)十一月、大阪豊竹座初演のもので、明和六年(二四二九)二月、大阪竹本座上演の八民平七作「裾重浪花八文字」の改作で、作者は不明です。お妻八郎兵衛の實説には大阪と江戸と両方があり、大阪には元祿三年歿(二三五〇)の嵐三右衛門の唄に「涙の時雨、古手屋の仇と情をときわけの薄き契や八郎兵衛が、妬の劍研ぎたて、吾と身をさく鰻谷」とあり、江戸には明和頃、かくし賣女銀猫のおつまと立花町の呉服屋八郎兵衛との情話がありますが、何れにしても事實は不明です。歌舞伎でも「鐘もろとも恨鮫鞘」となつて現存してゐま

す。大體の筋は、古手屋八郎兵衛が、丹波屋のお妻と馴染を重ね、お半と云ふ子まで生ませましたが、八郎兵衛の前身は武士で、其主人伊織が賣刀を紛失しましたのを、身に引き受けて詮議に心を盡し身を破き、其名刀を手に入れる金策に毎日家を外にして奔走して居ります、これを見ましたお妻は秘に母と計りまして、自分に心を寄せてゐます香具屋彌兵衛に、持參金付と云ふ事を條件として心ならずも祝言をして身を任せます。そして八郎兵衛にさんぐに愛想づかしを並べるのです。お妻はこうまでして、金子を工面して夫に忠義を立てさせようとしてゐるのです。お妻に深い企みのあることゝは、露知らぬ八郎兵衛は、お妻の今更の變心を怒て母とお妻を斬り殺し、自分も其場を去らず、自害して果てようと

しますが、娘お半の口から意外にも書置を開かされ、お妻親子の本心を始めて知るのです。そこへ義侠の友人銀八が現はれ、自刃せんとする八郎兵衛を強ひてと押し留め、彼を援けて舊主伊織の爲に忠義を全ふせしめようとします哀れな人情劇で有ります。

(床本) 鰻谷の段 (中)

移り香を襟袖口に付け札の羽織紋付島の内鰻谷に年古るく、古手商ひ丹波屋の主人は留守の八郎兵衛、女房お妻とその仲に子まで成したる夫婦中、他所には見えぬ裏表、解き分け兼ねる風情あり、早や市庫の戸鎖し時、花舞風の香具屋彌兵衛、後に仲人てんぼの十兵衛、案内につれて打通れば、出迎ふ母もニユ〜笑顔オ、これは〜十兵衛さん、何かな

しにいかいお世話、マア〜何かはさし置き祝言させて、落ち着きたうござります。ヤコレハ〜、御尤、したがお約束申したこの掣がね、双方御得心下され、仲人致すわれらも大慶、さて今晚の取り結びで、何が丸うゆくと云ふもの、また、あの野良松の八郎兵衛を掣になされては仲々この丹波屋の家は立ちますまい、とお爲を思ふてのこの仲人、先づ掣殿の氣立てと申し、男前は申すも及ばず、その發明、イヤモ、口で云ふ様なことではない、また商賣には至極の達人、世間のつきあひ家のしまり方、萬事抜目のない人柄、斯う云ふ掣をお取りなさるは、いやも廣大なるお幸せと、仲人口を言ひ並らべ、油流して述べにける、オ、これは〜十兵衛さん、お前の蔭でさう云ふ稀れな掣殿を儲けるとは。

娘も幸せ、この母は生き如來のよい入れ前でござります、オホ、と挨拶あれば十兵衛は、マア〜お袋これを御覽じ、掣殿より手土産の甘兩先づお渡し申すが、まあ祝言も首尾よう濟んだ上、後金の卅兩掣殿持參致せば直き〜お受取りなされてよからう、マア〜手土産の甘兩お受取りなされよと、渡せば母は、ホヤ〜と、金を見るより熊鷹の目には佛もなかりけり、オ、これは〜御念の入つた事やの、そんなら、これは一寸の手土産、後は祝言の濟んだ上、オ、祝言させいでよいもので御座りますか、ハハハ、オ、オ、これはまあ、御鄭重な事やのと、喜ぶ言葉に圖に乗つて、ア、何お袋、あらたまつた挨拶は五ひに取り置き、委細のことは十兵衛殿から聞きました、斯うなる事も皆縁づく、商賣違

ひの古手屋稼業、随分これから身を入れて、手廣らうに店も取り繕ひ親子の衆の力にならう、何と十兵衛どんそんなものぢやごんせぬかと、自慢の鼻毛、身を吹かす、母はニタ／＼側により、これは／＼、舞殿の痛み入ります御挨拶、がまあそれを聞いて落着きました、が、十兵衛様、こゝは端近か、奥へ御座つて祝言の盃事、ゆる／＼上つて下されりませ、サ、舞殿、斯う御座りませと先きに立ち、奥の間へ入りけり、お妻はそつと立ち出で、力なく

鏡立て、櫛取り上げて獨り言、ホンニ思へば女程、はかないものがあるかいな、言ふに言はれぬ心の切なさ、曇らぬ胸も黒髪、解くに解かれぬ白粉の、鏡に寫る恨めしさ、血を吐く思ひ紅筆の我が身も共に命毛も、身近き縁の契りぞと、食ひし

ばりたる奥の間より、それとも知らぬ娘のおはん、これかゝさん、お前髪撫でつけて何處へ行かしやるえ、わしも行かうと頑是なき、我が子に涙まぎらして、何をまあ何處へ行かうぞ、今宵は内にお客もある、またお婆様に叱られる、おとなしうしやゝと手を取つて我が子の顔を打ち眺め振分け髪を撫ぜさすり、心の中のもつれさへ涙の露のびん水や打しほれてぞ居たりける。

(床本) 鰻谷の段 (切)

隣座敷に彈出す、浮世を流す堀江川流れに淀む捨小船、繫がぬ縁は是非もなや、懸路の鬼か丹波屋の、妻に通ひしかね言も、昨日は今日の飛鳥川、歌も古手屋八郎兵衛、結合ふたに悪縁の、契も深き長堀の、つい一筋が鰻谷、我家の軒も我乍ら、外を

内なる八郎兵衛暖拂して内にいり、何何と思ふてやら、今日はさつぱり身仕舞が出来たの、父様、夕から待つてばかりゐたわいの、オ、然うであろ／＼、吾身がてつきり待つてゐやうと思ふて、途で買ふたうづら焼コレマア一ツ食うて見やと、甘き土産も親の恩、コレ母様、父様に土産貰うた、お前も一ツ遣ろかへと、いへど答へも、コレ／＼おつま、マヨウ来たともいひませず、俯向いて斗りゐるは、イヤ聞えた、アノ此中から頼んでおいた、金の工面もあらうぞいの、が出来悪ふてか、イヤコレ是だんないぞや／＼、吾身の手て出来ずば、又外に工面もあらう、女夫の仲は何のママ、遠慮する事がある、イエそんな事ぢやないわいな、ムウ其でなくば、マ何じやる、ま、扱は例の親子喧嘩ぢやの、アノ婆様の氣

を知つてゐて、せり合ふといふやうな、マ不調法なことがあるものかいの、ヨイ、ドレ、俺が中を直して遣らう、イヤコレ其挨拶は聞きませぬと、立出づる母が顔、コレ母者人、ソリヤ又お前どうした事じやへ、お妻に悪い事があれば、詫言するが男の役、イヤこれ、娘には何にも過りは御座らぬ、氣に入らぬと云ふは、此方の事、も此方の内へふつよりと、足踏して下さんな、お妻と縁は断りましたぞ、ム、ハテナ夫が女房に暇を遣るは世間の大法、其に引換、女房の方から、縁断ると云ふ此方の思案は、オ、鞆を取りました、オ、慮外乍娘には、歴とした男がござる、うか、と長居はなるまい、早う去んで貰ひましょと、聞く八郎兵衛膝立直し、屋敷奉行の其内から、得心づくで貰うたお妻、元よ

り子までなしたる夫婦、今御主人の御難儀故、人の目立つを如何と思ひ故と此家を遠ざけし、此八郎兵衛に暇もとらず、鞆を入れては済むまい、イヤこれ、いはしやんすな、爰の家は俺が家じやぞや、此方は別に家があれば、表向の男じやない、サ其じやに依つて此方から、隙遣つてとつた鞆、ムウシテ其鞆はどこに居る、オ、其鞆は爰にゐる、見知つて置いて貰はうと、親子が中に大座、ム、スリヤ此方が此家の鞆殿かオ、香具屋の彌兵衛様と云ふて、大金持の旦那様、ハ、ハ、慮外乍ら今日からお妻が正眞擬ひなしの花鞆殿、ム、貴様が香具屋の彌兵衛殿、名は豫て聞いたれど、顔見合はすは今が初め、ソリヤ互じや、コリヤナニ八郎兵衛、素寒貧のわれを逐出し鞆になるのも異なものなれど、親子

が強つてと云はれるに依つて、氣の毒乍ら我等が女房、此餓鬼も男の小悴なら、われと一緒に放りだせど、女の餓鬼ゆゑこらへてこますしたのがわれが産した子じやと思へば、嘘にも可愛ことはない、娘の子は父親に似ると、我によく似て小ませたしやツつら、其ちへ失せいと踏ちらせば八郎兵衛たまりかね、コリヤお妻、畜生めらに物は云はぬ、是程の事仕出すからは、我が知らぬと云ふことはあるまい、譯も聞かねば金輪際、隙やらぬ男の意地、包まざいへと、せちがふ夫、皆尤と思へども見合す母の顔形、見目潤ほす涙をば、隠して態と笑ひ顔、ホ、コリヤ可笑い、何程お前が夫程に云はんしても、母様には換られぬ、くどく云はず早ふ去んで下さんせ、スリヤ己も得心の上、彌兵衛と夫婦になるのじやな

我れ其では立つまいがな、ホ、ハ、は、はて立つも立たぬも金次第じゃ、はいな、オ、娘出来したよう云やつたなふ、コレ八郎兵衛我身にかゝつて此間から、お妻一人が何やらむしやくしや、譯を聞けば金の入る筋、女房の方から入れたして、男に持つてゐやうより敷金貰ふ掣殿を、入る方が當世々々、夫がいやなら今爰へざつと手土産二十兩、彌兵衛殿から貰ふた程、工面して持つて来い、よもや返事はなるまいがと、慾に引つばる熊手性、オ、金に目がくれ夫婦の義理も思はぬからは、一言も二言もない、けんどん邪見な已等に、可愛おはんは渡されぬ、娘よ来いと手を引いて行かんとすれど、しく／＼と、父様、どつこへも去て下さんなわるいことがあるならば、餘所の伯父様に詫言して、かゝ様と一緒に、

爰の内にて下され、拜みまする父様と、纏る我子を抱きしめ、子心にさへ其やうに思ふもの、己や何とも思ひをるまいナ、犬と云はふか、猫と云はふか、譬へん方なき人外めと掴みかゝるを彌兵衛おし留め、コリヤ／＼／＼何しあがるのじや、コリヤ今迄とは違ふぞよ、親が救した俺が女房じや、指でもさゝば頬で打ちをると、非道ながらも理の當然、引裂くやうに思へども、娘の爰に引かされて、取つ置いつの一思案、我子を見やる目の中は一つにどみる此場のしぎ、心残して出て行く、折から奥よりてんばの十兵衛、ア、いかいござうさ、目の覺め口に何やらむしやくしや、マアざつと濟んでお目出度い、御馳走酒のはつたりと、忘れてゐた内の用、仲人はよい加減、コレばさまさらばと云捨て、出行く門

と奥の間へ、母は彌兵衛を伴ひ入る跡打みやり女房が、心に泣けど目に泣かぬ、お半を傍に引き寄せて、コレお半、此間から云ひ聞かして置いた事、よう覚えていやるかや、アイ皆よう覚えてゐまする、オ、賢い子じや、コレ此母が今云ふ事、よう聞や、吾身もやがて成人して、どうでも一度は嫁入りする身、たとへ母が居ぬととも、二度の殿御を持やんなや、アイ其もよう合點してゐまするが、コレ母様お前は何として泣かしたる、氣あいいでも悪いのなら、薬買ふて来うかへと、俱にしほるゝ親身涙、オ、よういふてたもつた／＼、コレ母はどつこも悪うはなけれ共の祖母様が飯でも炊いてか、夫で烟たうて目が明れぬ、目があかれぬと涙にむせび泣き居たる、徒髮に留伽羅の浅き香りや香具屋の、花となりし

と聞くよりもさゝ時も時と、アノ歌
わいの、丁度吾身に引當てゝ世に譚
はるゝもアノ通り、八郎兵衛殿無腹
が立とうけれど、これ堪忍して下さ
んせ、エ、何にも知らぬこのお
半、一年々々立につけ、とゞま生
寫し、必ず〜出世して、此母がと
ひ弔ひ、コレかゝさま、そんならお
前は、まう死なしやるか、わしも死
にたい死にたいと、取付き歎く吾子
の顔、二目とも見もやらず、オ、よ
ういやつた〜、親なればこそ、子
なればこそ、六つや七つの子心にも
親を大事と思へばこそ、誰がマア其
様に親切にいふてくれうぞ、年頃日
頃信心する、天神様の御利生にも叶
はぬことか情なや、赦して下され八
郎兵衛殿、堪忍してくれ吾子やと、
抱しめ〜、春撫でさすり親と子が
涙の限り泣き盡す、心の内こそいぢ

らし〜、かゝる敷きを露知らず、待
ちに待ちたる、香具屋彌兵衛、コレ
〜お妻、そこに何してゐやる、盃
やら寢床やら婆様一人が打つたり、
舞ふたりイヤモいかう俺も急が来た
はいの、サア〜おぢや、分て戀し
いそなたの事、モ顔見てはこらへ
られぬ、ソレ其うつくしい心の奥
底解いて貰はにやおち付かぬ、サア
〜早ふ來てたもいの、サア行く
わいな、これ母様、わしも眠たい行
て寝やう、エ、何かに付けてじやま
な餓鬼じや、なこれお妻吾身はそい
つが可愛いか、アイいいえ、何のい
な、お前の娘と云ふではなし、退け
ば他人も同じ事、わしや何共思やせ
ぬと態とすげなく突放す、ムウそら
である〜、坊主が憎けりや袈裟ま
で憎いと、おれやモウ何じや知らぬ
が憎でらしい、其方としつぼり陸言

の、邪魔になる小びつちよめ、おれ
次第にしておきやと、首筋攫んで引
出し（こりや母と語らうてゐる間）
門に遊んでけつつかれと、外へ突出し
戸をびつしやり、追がの母も胴慾と
いはれぬ辛さ知らぬ子が、これ母様
わし一人寝るわいのう、おじさま明
けてと叩く戸の、譯も隔ても泣く涙
サア構はずと女房共と、迫立てられ
る身の辛さ、否ともいふにいわけな
き、吾子を捨てゝ奥の方、今更何も
詮方も、涙の時雨古手屋の、仇と情
をとき分けの、薄き契りや八郎兵衛
が、妬みの劍研ぎ立てゝ我と身を割
く鰻谷、ア、世には似た事もあると
いふが、アノ歌は古手屋八郎兵衛思
ひ廻せば我身の上に、一ツも違はぬ
七人の子はなす共、女に肌を赦すな
と聞いてはゐれど、彼奴ばかりはあ
ゝした、不心底があらうとは、徴塵

いさゝか思はね共、親の愆氣に引かされて、此八郎兵衛を見替たか、但
 又此中頼んだ金の工面拵へる當もな
 く、なければ夫の難儀と思ひわざと
 女夫と見せかけて、やつぱり金の才
 覺も、夫とは云はず心の謎、勘忍の二
 字はこぢやわい、ヤアそこに居る
 はお半じやないか、ヤア父様か、オ
 ウ〜此關いのに汝一人、母めはど
 こぞへ行きをつたか、イイエ母様は
 奥に居てぢやわいなあ。ヨウ何と云
 ふ、スリヤ汝を外へ放り出し、彌兵
 衛と奥に、チエ可愛いそちを構はぬ
 からは、男の義理も心底も、眞實捨
 てたに違ひないはい、エ、そうとは
 知らいで、おれが手にいろ〜道
 理をつけて見て、よもやと思ふた八
 郎兵衛が、堪々たがまう叶はぬ、憎
 さも憎し一討ちと、切つて入らんず
 はやり氣も思ひ直して、イヤ〜

イヤ畜生めらを切殺し、吾命を取ら
 れたときは、刀の詮議も、親の敵
 も得討たぬのみか、伊織様のお頼み
 なされた五十兩、忠兵衛殿へ戻さね
 ば、盡したことも水の泡、ハテど
 うがなと立つゐつ、憎さいや増す無
 念の涙、現在女房を人に取られ、賄
 甲斐なしと一生後指さゝれんも口惜
 と、駈出して立戻り、マア伊織様に
 此様子と、行かんとせしがふりかへ
 り、思へば憎しと又跡へ、内を覗い
 つ門を見つ、立つたり居たり身をも
 がき、千々に碎くる父親に、附添ま
 はる子もうろ〜、父様ねぶたい寝
 さしてと、せがみ立られ、オ、道理
 じや、親故汝も苦勞する、堪へて呉
 れよとばかりにて、子故の闇の憂思
 ひ、思ひ重る奥の間に三國一ぢや婿
 に成濟ましたしやん〜、しやんと
 納まる内祝ひ、是迄なりと八郎兵衛

門の戸蹴放し駈入れれば、音に驚き母
 親が、ヤ、八郎兵衛かといふ間もな
 く、肩先さがりに切つてこれ〜
 待つて〜と女房が、留め隔つる片
 腕、落て効なき息づかひ、娘は其儘
 父親が、振上ぐる手にぶら下り、父
 様去んで下されのう、お前が此所に
 居やしやると、かゝ様が死なしやる
 堪忍してと云ふ聲が、母の耳にや通
 じけん、お半はどどこにぞ、これ必ず
 必ず怪我しやんなへと、いふが此世
 の暇乞、一間の障子さつと明け、八
 郎兵衛は親殺し、此通り注進と裏道
 さして駈行く彌兵衛、ぼつ付いて一
 討と、思へど引かるゝ後髪、爰ぞ命
 の置所と、刀逆手に取直し、コレ父様
 死んで下さんないのと、取付く吾子
 を又抱きとり、堪へ兼たる溜涙、袖
 や袂に濡なせり、斯とは知らぬ銀八
 が、とつば川筋一文字、提灯さげて

つゝと入り、八郎兵衛内に居やるかと、上る足元親子の死骸、惻り見合す覺悟の刀、コリヤさせぬはと押しめ、八郎兵衛、仔細が聞たい、どうぢや、オ、銀八か、仔細と云ふたら八郎兵衛が、どうも男が立たぬに依つて、二人ながら打殺し、腹切つて死ぬるが高、お半が事を銀八頼むと、又取直す刀の柄、しつかと押へてもうよい、コリヤア八郎兵衛さう云ふ女房に掛り合せ、尤もとは思へども、刀の行方も知れず、今此中で腹切つては、主人へ忠義が立つまいぞよ、サアそこに氣の付かぬおれではなけれども、不義の相手は香具屋彌兵衛といふ奴、残らず見届け只だ今、訴人にうせたる天の網、かゝらぬ先に腹切覺悟、サア其綱の羅らぬ先き、爰を立退き伊織殿のお行方を尋ねずば済むまいがな、ム、

尋ねるとはソリヤ何で、オ、わけを知らねば合點行かない、意地悪の團兵衛めが梅川を請出すと聞き、二人連れで曲輪を驅落ち、その譚知つた仲居のお才、おれに逢ふていふことには、八郎兵衛様頼まれてござる五十兩の金子、采女様のお情にて其事は納つたれど、梅川殿の身請の金又も手づめの難儀となり、命づくに及ぶに依つて、お二人とも落しました、聞いて其儘逢に來た、こりや此場の仕誼は此銀八が身に引受け、人殺しは私でござると、こつちから名乗つて出て、意趣切にすりや此場は濟む、氣遣せずと早う行け、其事をマア半時先に知つたらば、たとへ人に笑はれても、お主ゆゑと了簡定め、仕様模様もあらうもの、今更返らぬ主君の身の上、不忠に不忠を重ねしも、憎い女が魂ゆゑ、見るも

中々腹立ちと、持つたる拔身でめつた突、見る目悲しき娘のお半、泣く膝に兩の手を、書置のこと、ヨウ何じや書置の事じや、アイ書置の事、一ツ何から申し残そうやら、案じに暮れて言ひ残しまゐらせ候、と云ふに不思議と兩人が、ム、さうして其跡は何と云ふて置いた、サ、ちやつと云へ、アイただ氣にかゝるはお主様、段々積るお難儀の上、金の入る譚聞ながら拵へるでだでもなく、親母様といひ合せ、夫の爲に此身を汚し、まゐらせそると聞いて驚く銀八が、オ、さうであらう、ヤレ賢い者じや、よう覚えてゐるなさうして其跡はどうじや、サア、ちやつといへ、アイ其もいといは致さねど、是迄ついに愛想盡かし聞かさぬお前に、愛想を盡かし譚を云ふたら留らるゝは知れた事、

それではやつぱりお主へ不忠、エ、この後はどうやらじやあつたなあ、ヲ、忘れたか、だんない、思ひ出して云ふたがよいはナ、アイそれでやつぱりお主へ不忠、エ、銀八其處退いて呉れ、俺が尋ねるは、コリヤ其お主へ不忠は今云ふたじやないいか、ト、モ氣のもめてある最中じや、サア其後を早う云や、エ、キリ、吐かせ、これはしたり八郎兵衛小さい者なぐつて虫でも出たら如何うするぞい、ナ、エ、たしなめ、ナ、可愛さうな、ア、だんない、ナ、と、は悪い奴ぢや、後でと、が背中へ大きなあつゝをすへてやるサ思ひ出して後を云へ、アイ、泣かなくてもよいわい泣くなよ、アイ、泣くなやい、アイ、泣くな、ア、年端もゆかぬにわれも親故苦勞するナア、サア其後を云へヨアイ、其譯

も得云はず、是許りが未來の迷ひ、云置たい事あれば、年端もゆかぬ者のこと、娘お半にあらかた言ひ残し候いひたい事も得云はぬ、無筆は何んの因果ぞや、是に付てもただ可愛いは娘のお半、精出して寺へもやり物も縫はせ大事に育て頼入候、不慥と思し一遍の御回向頼むと、様と聞いて八郎兵衛正體なく、エ、聞こえぬぞよ女房、さう云ふ事ならツヒ一言、明して云はば此やうなむごいめはさせぬはいやい、たとへ顔が立ぬといふても、お主ゆゑなら何の留う今思へば姑が憎う云ふたも裏の裏、お妻が代りにこなた一人、殺される心であつたか、さうとも知らず二人共、切つて捨たは何事ぞや赦して下され母者人、堪へて呉れよ女房と空しき死骸に取付いて、悔み歎けば銀八も、オ、道理々々と諸共に、

胸一杯につつかゝる、身も世もあらぬ雪氷、肝も貫く八郎兵衛が、涙の時雨古手屋の、昔も今も哀れなり、銀八はつと心付き、訴人したれば捕へに来るには定のもの、こゝ構はずと主君の行方、せめて親子の亡骸に、未來の引導、彌陀頼む、急いで用意と押入の、襖明くれば仕込の佛間、怪しや内に骨桶の二つありしも覺悟の用意、哀れいやますばかりなり、銀八立寄り骨桶を、手に取り上ぐればずつしりと、重いはいかにと蓋取れば、金子の包みに又恟り、オ、これこそ彌兵衛が土産の敷金、エ、此金故に二人共、惜しや命を果せしも、金が敵のうき世の中、せめて主人のお役には、包みほどける其中に、ヤア此一通は開き見て、ム、コリヤ彌兵衛めが、まさかの時、金取房すたくみの一札、エ、憎し、

と打ながめ、よく見れば見知りある、此一札と懐中より、取出す手帳に引合はし、コレ銀八、此帳面と此一札、ム、問ふまでもない同筆々々、エ、忝ない、スリヤ香具屋彌兵衛めは、當春屋敷へうせる盜賊、其時拾ひし此手帳、不斷放さぬ今この時、刀の詮議はあの彌兵衛、引捕へて詮議せば、親の敵も知るは必定、コリヤお妻喜べわれが忠義は立つたぞよ、魂去らずば、よう聞いて迷ふてばし呉れるなど、眞實こぼす一しづく、手向けの水と成りぬらん訴人に依つてあまたの人音、先々此方へと銀八も、隠るゝ間も荒醜共、人殺しの八郎兵衛、縛れ括れと聲々に、居らぬは必定裏道へ滅多むしように飛んでゆく。遣り過して八郎兵衛、銀八頼むと出る門口内と外とに隠れし組子、どっこいやらぬと取付く

を、引つかついで兩人が、眞逆様に井戸の中、心そぞろに鳴る鐘は、四ツ橋さして逃れ行く。



東京新派大合同

四月一日初日

毎日午後三時開演

第一 五人の斥候兵

幕

田坂具隆 原作
阿木元夫 脚色
八田元夫 演出

第二 娘の寫眞

幕

三好一光 演出
田島三津 演出
（舞臺三月號所載）

第三 大關・大ノ里

幕

鈴木深次郎 演出
村山知義 演出

第四 つや物語

幕

泉鏡花 演出
久保田万太郎 演出

御観劇料

特等席 四圓五十錢
一等席 三圓八十錢
二等席 二圓
三等席 一圓五十錢
四等席 一圓
五等席 五十錢
(税別)

ぼろり中座



連獅子

雄獅子
雌獅子
獅子

竹本文字太夫
豊和泉太夫
竹本泉太夫
竹本和泉太夫
竹本常子太夫
竹本土佐太夫
鶴澤友太夫
鶴澤友太夫
鶴澤友太夫
鶴澤友太夫
鶴澤友太夫
鶴澤友太夫

人形

雄獅子
雌獅子
獅子
獅子
獅子
吉田榮三
吉田榮三
吉田榮三
桐竹紋十郎

新曲連獅子

能曲「石橋」より生れた俗曲の獅子の曲は、琴曲、河東節、萩江節、常磐津、富本、長唄と、凡ゆる流派に行はれて、歌舞伎の獅子の所作と結んで發達したが、本曲も長唄「連獅子」の淨曲化で、雄、雌、子の三獅子が、天臺山中石橋に現はれて、牡丹の花に戯れる様を寫した豪華な一場です。

(床本) 連獅子

夫牡丹は百花の王にして、獅子は百獸の長とかや、桃李にまさる牡丹花の今を盛りに咲満ちて、虎豹に劣らぬ連獅子の、戯れ遊ぶ石の橋、抑々是は、尊くも文殊菩薩のおはします其名も高き清涼山、巽々たる巖に

梅澤昇座

三月卅一日初日

毎日正午二回開演

第一

旅

人

場

第二

馬鹿野郎の死

場

第三

忠次と頭鏡

場

御観劇料

一 椅子席 四十錢
二 等席 七十錢
三 一等席 一圓五十錢
(税別)

ぼどうり 角座

渡せるは、人の工に非ずして、おのれと此處に現はれし、神變不思議の石橋は、雨後に映ずる虹に似て、虚空を渡るごとくなり、峰を仰げば千丈の雲より落る瀧の糸、谷を望めば千尋なる底は何所と白浪や、巖に眠る荒獅子の猛き心も牡丹花の露を慕ふて舞遊ぶ、胡蝶に心きて、花に顯れ葉にかくれ追つ追はれつ餘念なく、風に散行く花びらのひらりひらり、翼を追て、共に狂ふぞ面白き時しも簫笛琴篋綵の妙なる調べ影向も、今行程によも過じ斯る峻岨の巖頭より強臆ためず親獅子の恵みも深き谷間へ、蹴落す小獅子は轉ろろ、く、落つると見えしが身を翻し爪をけたて、馳登るを、又突落し、突落され、爪のたてども嵐吹く、小菴にしばし休らひぬ、登り得ざるは臆せしか、アラ育てつるかひなやと望

む谷間は雲霧に其れともわかぬ八十瀬川、水に寫れる面影を見るより小獅子は勇み立ち、翼なけれど飛上り數丈の巖を難なくも馳上りたる勢ひは目覺しくも又勇まし、獅子團亂だんらんの舞樂のみぎん、牡丹の花ぶさ匂ひみち、大きんりきんの獅子頭、打てや囃せや牡丹芳々、黄金の瑞現れて花に戯れ枝に臥し轉び、實にや上なき獅子王の勢ひ藤かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞納め獅子の座にこそなをりけり。

尾上菊五郎一座

大谷村友右衛門
中村梅玉

四月一日初日

毎日午後二時半開幕

第一 根元草摺引

吉川英治原作

第二 太閤記・藤吉郎篇

第三 和田合戦女舞鶴

岡鬼太郎補綴

第四 藤娘

第五 傾城友魂香

川尻清澤作

第六 昔嘶桃太郎

御観劇料

樓	八	十	錢
菊	一	圓	三十
一等	二	圓	三十
二等	一	圓	七
三等	七	圓	

(他二人母稅)

大阪歌舞伎座



野崎村の段

お久松	お久松	お久松	お久松	お久松
作	光	染	勝	し
本	本	本	本	本
相	伊	播	津	豊
生	南	路	磨	鶴
太	達	太	太	澤
夫	夫	夫	夫	友
夫	夫	夫	夫	平

人形

船頭	油屋	丁稚	親	下女	娘	娘
竹松	お久松	久松	およし	お染	お光	お光
吉田	吉田	吉田	桐竹	桐竹	吉田	桐竹
玉	小	文	門	紋	榮	紋
徳	兵	二	造	昇	三	十
	郎	郎			郎	郎

お染新装歌祭文

野崎村の段

お染久松の情死事件を（お染久松の心中事件は、従来否定されてゐたが黒木勘藏氏の考証から否定説は否定されることになつた）最初劇化したのは寶永七年（二三七〇）正月、大阪・野八重桐座上演の「心中鬼門角」で、歌祭文にも唄はれて大阪市中の評判であつた、この人氣を利用して淨瑠璃に仕組んだのが、寶永八年即ち正徳元年（二三七）四月、豊竹座初演の紀海普作「お染久松袂の白しぼり」で、同系狂言の源となつた。これから明和四年（二四二七）十二月、大阪北堀江座上演の菅專助作、「染模様妹背門松」となり、これらを粉本として生れたのが、この近松

半二作「新装歌祭文」で、安永九年（二四四〇）九月、竹本座に上場された。而もこの作は半二式の技巧に富んだ舞臺で、殊に野崎村の段が勝れてゐる。その後、文化元年（二四六四）八月、佐川魚磨の「増補新装歌祭文」も出た。この略筋は、野崎村の百姓久作の娘お光は、久松ともからの許婚、いよ／＼祝言と定つて髪を結つたり臍を刻んだり、いそ／＼してゐる所へ、野崎の觀音参りをかこつけて久作會ひたさにお染がたづねて来る。到底この世で添はれぬ時はかねて覺悟の心中と目と目で物言ひ合せる——女同志の角つき合も東の間、お光はそれと察し、忽ち自分の戀を捨て黒髪を切つて二人を添はせようとする、その美しい心根にお染久松は涙にむせぶ、やがてお染は舟で久松は駕で、梅の香る村里

を去つて行く。

(床本) 野崎村の段

引立入にけり後に娘は氣もいそ／＼日頃の願ひが叶ふたも、天神さんや観音様第一は親のおかげ、エ、こんな事ならけさあたり、髪も結て置ふもの鐵漿の付様挨拶もどふ言うてよかるやら覺束鱧こしらへも祝ふ大根の友白髪末菜刀と氣もいさみ、手元も輕ふちよき／＼、切ても切れぬ戀衣や、本の白地をなま中に、おそめは思ひ、久松が後を慕ふて野崎村つゝみ傳ひに漸々と、梅を目當に軒のつま、供のおよしが聲高に申御寮人様、彼人に逢ふばかり寒い時分の野崎參り、今船の上り場で、おしへて貰ふた目印のこの梅、大方爰でござりませふぞへ、ア、コレもそつと靜に言やいの、久松に逢たさに來

る事は來ても、在所の事目立ては氣の毒、そなたは船へサ早ふ／＼と、追やり／＼、立寄ながら越かぬる戀のとうげの敷居高く、物申頼み申ませうと言もこは／＼暖簾ごし百姓の内へ改まつた用があるなら、はいらしやんせ、ハイ／＼卒爾ながら久作様は内方でござんすかへ、左様なら大坂から久松といふ人がけう戻つて見へた筈、ちよつと逢はして下さんせ、といふ詞つき、形かたち常々聞た油屋の、扱はお染と悋氣の初物、胸はもや／＼かき交ぜなます、まな板押やり戸口に立寄り見れば、見る程、エ、美しい、あた可愛らしい、其顔で久松様に逢してくれ、ホ、そんなお方はこちや知ぬ、餘所を尋ねて見やしやんせ、あほうらしいと、はら立聲、心付ねばホンニまあ、何ぞ土産と思ふても急な事、コレ／＼

女子衆、さもしけれ共、是なりとと夢にもそれと白玉か露を帛紗に包の儘差出せば、こりや何ぢやへ大所の御寮人様さま／＼、と言はれても心がいたらぬ置しやんせ、在所の女子と侮つてか、ほしくばお前にやるはいなと、やら腹立に門口へ、ほればほどけてばら／＼と、草にも露銀けし人形、徴塵に香箱割出した中へ、つか／＼親子連出でくる久作、どうぢや鱧は出來たで有ふ、扱祝言の事婆が附てきつ悦じやが、年は寄まいものさつきをやつさもつさで取上したか、頭痛もする、いかふ肩がつかへて來た、ア、橙々の敷は争はれぬものじやはいの、左様なら、そる／＼わたしがもんで上ませふかヤソリヤ久松忝い、老ては子に隨へじや、孝行にかたみ恨のない様に、コリヤお光よ三里をすへてくれ、ア

イ／＼そんなら風のこぬやうにと、何がな表へ當り眼、門の戸びつしやりさしもぐき、燃る思ひは娘氣の、細き線香に立煙り、サア／＼親子とて遠慮はないぞ、もぐさも^{けんま}疥癩も大掴みにやつてくれ、アイ／＼きつうつかへてござりませぬぞへ、そうでも有う／＼、次手に七九をやつてたも、ヲツトこたへるぞ／＼、サアと／＼様すへませぬぞへ、アツイ／＼、えらいぞ／＼、翌が日死ふと火葬はやめにして貰ひませう、丈夫に見へても、もう古家屋根も根太も、こりや一時に割普請じや、アツイ／＼、アツ、ヲ、と／＼様の仰山な皮切はしまひでござんす、ほんに風が當ると思や誰ぢや、表を明けたそらな、しめて參じよ、立を引留、ハテよいわいの、晝中にうつとしい、ノウ久松／＼、コリヤ久松餘所見ばかり

して居ずと、しか／＼と揉ぬかいのサア餘所見はせぬけれど覗くが悪い折が悪い／＼／＼と目顔の仕かた、ヤア悪いの覗くのと、足に灸こそすへて居れ、どこもお光は覗きはせぬがな、サアアノ悪いといひましたは、ヲ慥今日は癩瘡日、それに灸は悪い／＼といふたのでござりませぬ、愚痴な事を、此様に達者なは、ちよこ／＼と灸をすへ作りをする、そこで久作、アツイ／＼、アツ／＼、何じやわい、わが身達も達者な様に灸でもすへるのがおいらへの孝行じやぞや、ヲ、そふでござんす共、久松様には振袖の美しい持病が有て招いたり、呼出したり憎てらしいアノ病づらが這入らぬやうにしきの上へ大きふしてすへて置たい、コレお光殿、振袖の持病のと色々の耳こすり、はしたない事聞ては居ぬ

ぞや、ホ、ホ、かはつた事がお氣に障つた、ヲ、障らいぢや、コリヤおかししい其譯聞くぞへ、いふぞやと我を忘れていさかきを外に聞く身の氣の毒さ、振の肌着に玉の汗、久作も持あつかい、ア、コリヤ肩も足もびり／＼するがな／＼、まだ祝言もせぬ先から女夫いさかいの取越かいやい、灸業のかはり、喧嘩の行司さすのかいやい、エ、二人ながら嗜め／＼、イエ／＼構はふて下さんすな今の様な愛相づかしも病づらが言はしくさる、何をいふやら、もふ／＼兩方共おれが貰ひじや、ヨヨ、中直しが直に取結びの盃、髪を結たり、鐵漿も付けたり、湯もつかうて花嫁御をコリヤ作つて置けと、打笑ひ無理に納戸へ連て行く、其間遅しとかけ入お染、逢たかつたと久松に縋り付ば、ア、コレ聲が高うござります

思ひがけない爰へはどうして譯を聞して、と問はれて漸々顔を上げ、譯はそつちに覺があらふ、私が事は思切、山家屋へ嫁入せいと殘して置やつた、コレ此文、そなたは思ひ切る氣でもわしやなんぼでも、得切らぬ、餘り逢たさなつかしき、勿體ない事ながら、觀音様をかこつけて、あいに北やら南やら、しらぬ在所も厭ひはせぬ、二人いつしよに添ふなら飯も焚ふし、織つむぎ、どんな貧しい暮しても、わしや嬉しいと思ふ物、女の道を背けとは聞へぬわいのどうよくと恨のたけを友禪の振の袂に北時雨、晴間はさらになかりけり曇勝なる久松も脊撫さすり聲ひそめ其お恨は聞てあれど、十ヲの年からけふが日迄、船車にも積まれぬ御恩仇でかへす身の徒、冥加の程も恐れれば、委細は文に残した通り、山

家屋へござるのが母御へ孝行、家の爲よう得心をなされやと、いへどいらへも涙聲、いやじや、わしやいやじや、今となつてそう言やるは是までわしに隠しやつた許嫁の娘御と女夫になりたい心じやの、是非山家屋へ行けならば、覺悟はどうから極めてみると、用意の剃刀取直せばそれは短氣と久松が留ても留らず、イヤ、そなたに別れかた時も何樂みに生て居よう、留ずと殺して、と思ひ詰たる其風情、始終後に立開親其思案惡からうと、言れてハツト久松お染、騒ぐを押へて、ヲ、大事ない、アア、下に居や、ハテ扱マア下に居やいのふ、因縁とは言ながら、和泉國石津の御家中相良丈夫太夫様と言ふれこさの息子殿、聊の事で家が潰れてから、わがみの乳母はおれが妹、其縁で十ヲ

の年まで育て上たこの久作は後の親草ぶかい在所に置より智慧附けの爲油屋へ丁稚奉公、それ程までに成人して商ひの道、讀書まで人並に成たは、コリヤ親方の大恩、其恩も義理も辨へぬは是見や、先に買ふたお夏清十郎の道行本、嫁入の極つてある主の娘をそゝのかすとは、道知らずめ、人でなしめ、サコリや清十郎が咄じや、はいの、とうから意見もしたかつたけれど、丁度今の様な事が有ふかと、それが悲しき一日延二日延しする間、降てわいた銀のもめ事、ヤ是言ひ立てに隙を貰ひわけて置のが上分別と思ふから引負の銀の工面、どの様にきばつても高の知れた水呑百姓、わづかの田地着類著そげお光めが揃拜まで賣代なし、やう、拵へたさつき金の、なさぬ中でも親子といふ名が有からは肉身

わけた子も同然、可愛ゆふなふて何とせふ、コレお染様ではない此本の
 お夏とやら清十郎を可愛がつて下さるは嬉しい様で、ア、恨めしいわいの、開ての通りお光めと女夫にするを樂しみに、病苦をこたへて居るアノ婆さまに、今の様な事聞かしたら何と命がござりませふ、ぞいの、若い水の出端には、そこらの義理もへちまのかはと投やつて、こな様といつ迄も添遂らるゝにしてからが、戸は立られぬ世上の口じやはい、エ、あの久松めは、辛棒した女房を嫌ふて、身上のよい油屋の舞になつたはあれやコレ榮耀がしたさぢや、皆欲じや、人の皮着た畜生めと、在所は勿論大坂中に指さゝれ人交りがなりませふかいの、コレ、愛の道理を聞譯て、思ひ切て下され、申しコレ拜みますはいの、是程い

ふても聞入ず、親御達が満足に産つけて置しやつた其體を切さいて淺間しう死るのが女の道か、心中か、サ久松も其通り不義密夫の惡名受、實親の名を汚すばかりが、世間の義理も主の恩も、むちやくちやにして仕廻のが侍の子か人間か、返事次第で思案があると眞實眞身の強意見、骨見にこたへて久松お染何と返事もないじやくり、是程いふても返事もないのは、コリヤ二人ながら不得心じやの、ア、勿體ない實の親にも勝つた御恩、送らぬのみか苦をかけるも私が不所存から、イヤ、そなたの科ではない、皆此身の徒から親にも身にもかへまいと思ひ詰ても世の中の義理にはどうもかへられぬ、成程思ひ切ませふ、ヲ、よう御合點なされました私もふつり思ひ切、お光と祝言致しまする、そんならそなた

もお前もと互に目と目にしらせ合、心の覺悟は白髮の親仁、アノきつぱりと思ひ切て祝言をしてたもるか、何の嘘を申ませう、娘御も今の詞に微塵も違ひはござりませぬか、久松の事は限り、わしや嫁入をするはいの、ヲ、出來た、むくつけな親仁めと腹も立ずよう、聞入て下さりました、晩の間も知れぬ婆が命息のある中祝言が濟んだと聞かして下さるが大きな善根、ヤ善は急げじや今爰で盃さそ、おみつ、と呼立る聲聞へてや、病床より、母は漸く探り出、親仁殿久松もそこにか、待に待た娘が祝言嬉しうて、此間にない氣色のよさ、大煩ひの上、目迄潰れた因果人、佛様のお迎ひを待乗たに、難面い命があつたりやこそ悦ぶ聲を聞といふも、孝行な久松が蔭、ふつゝかな在所生れ心には入る

まいけれど、末の面倒見てくざされ
頼みまするといふ中も、痰火は胸に
せき上せば、エ、此寒いのには寝所に
やつぱり居たがよござりませぬ、冷
れば悪いと蒲團の上抱きかゝへて久
松が、介抱如才納所より親子の中も
丸盆にのせた盃銚子鍋運ぶ久作、コ
レおぼゝやつぱり寝ては居やらいで
したが嶋臺のなにかわり、世話事の
尉と姥も新しい、目の見へぬは目出
度秀句じや、ハ、ハ、ハ、ハ、エ、目出
度次手に此嫁は何所に居るぞい、お
みつゝと尻がるに立て一間を差覗
き、ハテ出ぐすみをして居るは、そ
れでは果ぬと手を取て、サア、マア、
マア、嫁の座へ直つたり、ヤ、ヤ、
ア直つたり、エ、時に一家一門着の
儘の祝言に改まつた綿帽子鬱陶しか
らう取てやると脱すはづみに舞も抜
て惜げも投島田根より、ふつゝと切

髪を見るに驚く久松お染久作あきれ
て、こりやどうじやといふ口押へて
コレ申と、様もお二人さんも何にも
いふて下さんな、最前から何事も
残らず聞ておりました、思ひ切た
言はしやんすは義理にせまつて表向
底の心はお二人ながら死ぬ覺悟でござんしよがな、サ、死る覺悟で居やしやんす、かゝ様の大病どうぞ命が
取とめたさ、わしやモウと思ひ
切た、ナ切て祝ふた髪かたち見て下
さんせと兩肌を脱だ下着は白無垢の
首にかけたる五條袷、思ひ切たる
目の中に浮む涙は水晶の玉より清き
貞心に、今更何と詞さへ涙吞込、
で、こたゆるつらさ久松お染久作も
手を合せ、何にも言はぬ此通りじや
、女夫に仕たいばつかりに、
そこらあたり心にも付ず蕾の花をち
らしてのけたは皆おれがどんなから

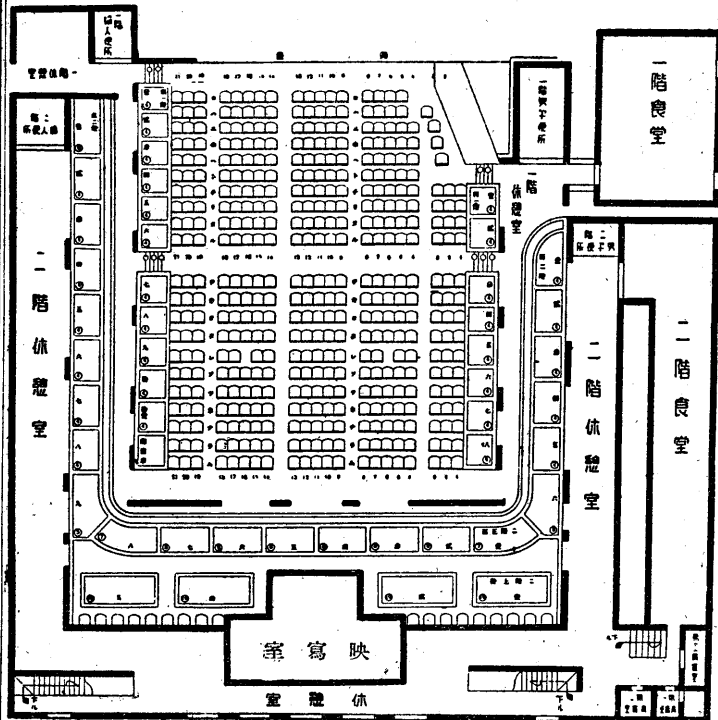
赦してくれも口の中、聞え憚る忍び
泣、ア、冥加ない事おつしやります
所詮望は叶ふまいと思ひの外、祝言
の盃するやうになつて嬉しかつたは
たつた半時、無理にわたしが添はふ
とすれば死しやんすを知りながら、
どふ盃がなりませぬぞいな、添ふに
添はれぬ此の身の因果、せめて未來
は佛にとあきらめ切つ投島田、心を
すいしてお二人共仲よふ添ふて下さ
んせと、恨みつらみも得もいはず、
泣聲せじとくひしげ、四人の涙八
つの袖、椀並八ヶの落し水、膝の堤
や越ぬらん、見聞つらさに忍び衆、
お染は覺悟の以前の刺刀なむあみだ
佛と自害の體久作あわて押とどめ、
コレ娘御何が不足で死るのじや、こ
れ程いふても聞入れずば、おれが先
へ物の見事に死んで見せふか、と、
様が死しやんすりや私も生ては居ま

せぬぞへ、どふ有つても死たくば、
 ばも娘もおれも死る、三人ながら
 見殺す氣か、サアそれは思ひ留つて
 下さるか、但し死ふかサア、
 と三方が義理と情と恩愛のしめ木に
 かゝる久松、お染死る事さへ叶はぬ
 は、いか成過去の報ひぞと前後正體
 泣倒れむせ返るこそ道理なれ、久作
 涙押し拭ひ、どふやら斯やら合點がい
 たそふな、嘸母御様が案じてござら
 ふ、大事の娘御慥なものにイヤそれ
 には及びませぬ、母が慥に請取まし
 たと言つゝ這入れば、ヤアかゝ様、
 ハアはつとばかりに詞なく、差うつ
 むけば、コレお染野崎参りしやつた
 と附て餘り氣遣ひさ、イヤ氣なぐさ
 みによからうと後追ふて來て何事も
 殘らず附た夫婦の衆の親切、お光女
 郎の志、最前からアノ表でわしや拜
 んではつかり居ましたわいのふ、サ

ア觀音様の御利生で、けがあやまち
 のなかつた癖しき、是から直にお禮
 参り、言譯が立からは久松も元の通
 り戻つて目出度う正月しや、幸ひわ
 しが乗て來たアノ竹輿でコレ久松、
 そなたは堤、お染は船、別れゝに
 往るのが世上の補ひ、心の遠慮、ハ
 イ、左様でござります共、お志
 ぢや乗ていにや、娘は船へと親々の
 詞に否もいひ兼ねおしの片羽のかた
 ゝに別れて、二人は乗うつれば兄
 さんお健で、お染様モウおさらばと
 詞まで早改まるお光尼、あはれをよ
 そに水馴棹船にも積れぬお主の御恩
 親の恵の冥加な、取分けてお光殿こ
 うなりきたるも先の世の定まり事と
 あきらめてお年寄れた親達に介抱頼
 むと言さして、泣音伏籠の面ぶせ船
 の中にも聲上て、よしないわし故、
 お光様の縁を切らしたお憎しみ、勤

忍して下さんせ、ア、譯もないお染
 様浮世放れた尼じや物そんな心を勿
 體ない短氣おこして下さんすなへ、
 ア、娘が言通り死で花實は咲ぬ梅、
 一本花にならぬ様目出たい盛りを見
 せてくれ、随分達者でハイ、お前
 も御無事で、お袋様もお娘御もおさ
 らば、と、遠ざかる船
 と堤は隔たれど、縁を引綱一すじに
 思ひあふたる戀中も、義理の柵情の
 かせ杭かごに比翼を引わくるこゝろ
 ぞ世なりけり。

文樂座御場席案内



御、觀、覽、席、は、大、部、分、椅、子、席、に、な、つ、て、居、り、ま、す、か、ら、お、一、人、で、も、御、愉、快、に、洋、服、で、お、樂、に、御、見、物、が、出、來、ま、す、ま、た、お、出、入、が、御、自、由、で、す。

前、賣、切、符、壹、等、席、の、お、切、符、は、五、日、前、か、ら、發、賣、致、し、ま、す、ま、た、五、日、以、後、の、お、切、符、も、壹、等、席、に、限、り、御、豫、約、申、し、上、げ、ま、す、か、ら、上、圖、の、座、席、表、に、依、つ、て、お、早、く、御、望、み、の、御、場、席、を、お、申、し、込、み、に、な、れ、ば、お、心、の、ま、ま、に、お、好、き、な、處、が、御、自、由、に、と、れ、ま、す、御、用、命、の、お、節、お、呼、出、し、の、電、話、は、南、四、七、壹、番、で、御、座、お、ま、す。

切、符、賣、場、右、指、定、席、切、符、は、當、日、前、賣、と、も、正、面、西、側、本、家、入、口、に、て、發、賣、し、て、居、り、ま、す。
二、等、席、三、等、席、切、符、は、當、日、正、面、入、口、に、て、發、賣、致、し、ま、す。

觀賞おほえ

昭和十五年四月 日

妹脊山婦女庭訓

おつま
八郎兵衛
櫻鏝恨鮫鞘

新曲
連獅子

お松
久松
新版歌祭文

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場と云へます。

文樂座人形淨瑠璃は 嘗て大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に反かねば、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別階の階上、階下は大食堂と喫茶室が御座居ます。賣店 は 二階東側と二階西側休憩所に御座居ます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座居ます。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。
御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ます

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを付けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあられるサービス機關として
案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じよろづ、御案内申上げる事に致しました。御一報次第登上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十五年三月廿一日印刷

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹株式會社大阪支店

昭和十五年四月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
總發行所 鳥江鎮也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二
印刷所 永井日英堂印刷所

一部
金二十錢

文樂座南一食堂

御食事の御用は一幕前には御下命賜
はばれ至極御便利で御座すまい

大坂四ツ橋

御宴會にも
御家族連にも

南温泉料理



電話南(75)

七〇一
三三三
三三三
四三二
番番番番番